

一第四十二圖手型第十七挿法に依り葉ナンテンを用ゐて上部疎に眞行草位を作り水際にヒカゲカツラをあしらひ下部三、四寸の高さにマガリツト五七輪を以て眞位のナンテンの水際の後側より順次前方に三位を作り、又其のマガリツトより低い目にヤブカウジ二三點を入れる。尙ナンテンの葉先の向方は随分複雑なものであるから其葉先及び幹の姿勢に注意して入れ、それに實のあるときはヤブカウジを使ふてはならぬ。器は薄型の一尺以上尺二寸ぐらい迄のものがよからう。

◎懸岨式クロマツミバラ、ボタン、ハボタンの内一種

一自然懸岨の箇所に生育したるもの又は大木の枝が一旦は順調に發育して或る障害になり急角度を以て下向斜に發育したるクロマツを手型第二十挿法及び第二十一挿法によつて活けるこ

きに其兩種挿法共に「草」及び草位控又は「懷」等に標題の内一種をあしらうのである之を畫題としてはバラなれば不老長春ボタンなれば不老富貴と稱へるのである又ハボタンを使ふ場合に「草」又は「懷」のいづれかに黄センリヤウを添へるのもよからう。

然し此懸岨式挿法の要點としては大程マツ一本を以て技術を現すものである依てそれだけ他の凡ての挿法より一層の注意をせねばならぬ先づ第一に其のマツと器物大小の調和を見計らい次にマツを手にして本勝手非勝手及び根方の出按配を見定めるのである稀には其木を花器の後方より前方に婉曲して落附のある型になり又は同じ類のもの二本を使ふて活けることもあるが自然の姿、即ち葉先をなるべく上空に向け殊更眞位

のものに特に注意をせねばならぬ、そして此マツを活け上げても容易く鋏をもつて枝を切拂ふことは出来ぬが其前面より見たときに殆んど三角形△なりに透間なく枝葉の繁茂したものは巻頭手型の何れかに適應すべく程よく枝葉を切り透し草位及び「懐」等に草花をあしらうのである、兎も角此挿法の主眼とする所は根方のさめやう即ち此所と云ふ所假令は寫眞術のピントを合すやうなものである。

尙此瓶花の臺卓に就てもよく注意せねばならぬ其卓の高低はマツの下向梢より床上迄相當の間隔あるやう見計らうのであるが何れにしても餘り細脚のものはひよろ／＼として脚元がたよりなく見へる。

却説是れ迄の文意は懸崖式マツの挿法に就いて述べたもので

あるが著者が此挿法の一例として挿畫第四十九圖の瓶花を畫くに當りその素養なき結果其意を満すこと能はず餘儀なく筆に任せて單にマツのみの瓶花となつて残念の事であるが然し實物の瓶花としたときには「草」の後ろ下手にランか又は「草」と根元の間レイシ、バラの内の一種をあしらうのもよかるう尙亦草位の枝がなくして眞位（眞座）の幹の屈曲部に相當の力（技葉）あるものと假定するときには偕て其あしらいてある即ち「草」の箇所は婉麗なるボタン瀟洒なるバラの内何れのものか此マツに適し、そして其力（大き）が眞、行との釣り合を保つかを見定めるのが各自練磨の功に依るのである。

◎一本の木にて三才（眞、行、草）を具備したるマツ又は

苔附サツキ其他

一 マツ又は苔附サツキ其他一本の木にて三才を備へたものを盛花として鉄鉢型の器に活けるとときにはマツならばその「懐」
 「谷」「控」等にムメをあしらひ根方にヒカゲカツラを布きフ
 クジユサウ、ヤブカウジ又は小葉のクマザ、等を少い目にあし
 さらうがよい、尙亦その木がそれ以上に「控」「谷」「懐」の全
 部の役枝を具備しあしらいを入れる餘地のなきときにはそれ
 を一箇の庭園樹木と看傍し景花の主たる材料として扱ふのが
 よい依て比較的器の大なる平水盤を用ゐるその樹の眞位に當る
 はうを器の左右何れかに片寄せ其根方にヒカゲカツラにハナ
 ゴケ(二七四頁参照)を取交せて布詰め一方その樹と反對の側
 (草座)(意匠挿法参照)に餘地の廣過ぎると思ふたときには

水面を現し之れを池水と看做すのである、其畔には未生のコ
 マツ、シユンラ、カンギクの類のものを撰むか又は池畔梅樹
 の根方に二三點のヤブカウジをあしらうのもよからう、兎に
 角景花としてはあしらいのものを以て寫實的に技術を現はす
 ものであるといふことを記憶せねばならぬ。

◎懸崖式ムメの古木ニハボタンニス井セン又はセンリヤウ

一 ムメにして本法に適ふた幹のものは餘り澤山に見當らぬもの
 であるが其内幾分横勢のものを場合により懸崖に活けること
 には餘儀なく其根方を折り撓め恰好を附けるのであるが其梢
 までも數箇所折曲てわざと風情を附けることは見苦しいも
 のである其他凡ての注意すべきことは前條マツの活方を會得
 して活けるのがよからう。尙活け上てから枝を拂ふた跡の切

り口が目障りのさきにはムメ苔を貼つて見得よくつくらしい草位にハボタン又はセンリヤウを入れ「懐」にはス井センをあしらうのがよからう。

◎立幹マツ、ラウバイ

一立幹のマツ一本の姿よきものを以て第五十五圖の例畫に依り活けるごきに此マツは自然の風姿を供へたものであるから挿花の技術としては先づ最切に花器の撰擇である。挿畫に用ゐた鉢は支那製にして地模様ある青地薄もの、口径一尺二寸くらゐのものを使ひマツは口径以上二尺二三寸の丈けに入れたものである。依つて其木の向け方、寸法及び之にあしらふ花の適否を見分けることが肝要である。尙草位のラウバイは手型第十一挿法に依り淡白とあしらうがよからう。

◎カキツバタ (莖に曲あるもの) ボタン、マガリツト

一カキツバタの莖に曲あるもの (挿畫第五十圖ナンテンの如く其莖の曲つて花の上向きのものなれば尙更よろしい) 二本を以て手型第二十二挿法第一例に基き眞位行位を作り草位には莖の短きマガリツトを相應に入れ其「懐」にボタン一二輪を丈け低く入れるそしてボタンの葉を以てカキツバタの根方をあしらうのがよい、器は平籠又は淺手の一尺くらゐのものがよからう。

◎ムメ (野梅)

一其幹の細き單辨白色の野梅一種を以て手型第八及び第十一挿法に基き餘り其挿法に拘泥せず花形を淡白と平籠又は古備前の平鉢に納れるのがよい然し此ムメは氣條のスクスクと眞

直に生へたもの又は曲のなき太き幹ものは避けるのがよからう。

◎シロユリ、マガリツト、コンギク

一手型第十挿法によりシロユリを以て眞位（開花）及び行位（半開）を作り其眞位の低き「懐」より「谷」に涉つてマガリツトを使ひ草位は主にコンギクを入れる然し此コンギク「谷」のマガリツトの區劃をせず紫白入り交りに挿すのがよい。

◎オモト一種活け

一少し大葉のオモト一種を以て手型第五挿法第一例自然本位の挿法により之れを活けるごきには其眞、行、草の凡ての葉の下部より「後添」「前添」尙「懐」「谷」等のあしらいの葉は勿い。

論であるが例畫に表す如く眞位の根として少し小葉のものを以て全型と同じ姿のものをあしらい又草位前添には泥葉を使ふのもよからう次に「懐」と草位との間低き「谷」には其實一本を挿すのである、器は少し深手のものがよからう。

◎ハイビヤクシン又はヒガンサクラ

一流儀花の特技とする其曲線美をより一層發揮すべくハイビヤクシン又はヒガンサクラを以て龍爪體挿法により之を活けるごきには其根方を手前に向けて挿し全體を「ふ」字型に活けるのである、本挿法に係らず總ての細ものを流儀花の式により平丸鉢に活けるごきには著者考案の花止器（頁参照）を使用するのが便利である。（挿畫第六十八圖参照）

◎温室咲のサクラミキセンリヤウ又はキンセクワ

温室咲のサクラを以て手型第十一挿法又は全十二挿法によつて活けるときには「懐」「谷」「草」位にキセンリヤウをあしらひ又其「懐」が他のものを入れる餘地のなき枝振のときにはキンセンクワを「谷」及び草位にあしらひ尙ほ眞位の根方にも根をこして二三本高低に入れるのがよからう。

◎紫モクレンとキンセンクワ

一紫モクレンの若木の立姿のものは手型第十挿法の第一例又は風靡體挿法第五例に依つて活け又た拈ねた古木の横姿のものは手型第十一挿法第一例及び第十二第十七挿法に依つて活けるそして其凡ての「懐」「谷」「控」等に薄黄色の勢ひよきキンセンクワをあしらうのがよからう。

◎ムメ（幹に曲あるもの）（ス井セン、ツバキ）又は（ハボ

タン、センリヤウ）

一總體ムメには女劃の姿にして雅趣ある瓶花に用ゐられるが如く其枝振りに屈曲の多いものである、依て盛花にも此意を以て、よく姿勢に注意し少々枝振の交叉するこゝがあつても其枝なごを餘り切り、又は撓めずして第二十五圖手型第十二挿法に依り圖の如く大葉のハポタンと二種で活け上げ、又其ハポタンの小形のときには之れを「谷」に使ひ「懐」にス井センとセンリヤウか又はツバキの類を少しあしらうがよからう

◎ムメ（直幹のもの）ミフクジュサウ、ツバキ、カンギクの内一種

一直幹のムメで其枝の秀でたものは手型第十挿法に依り淡泊さカンギク、フクジュサウ又はツバキの何れかの一種を以て圖

の如く「谷」を草位ごにあしらうのがよい、器は澁味な色物がよからう、第二十圖を参照せられたい。

◎ラウバイ、ハボタン又はオトメツバキ

一ラウバイを手型第十一第十二挿法に依り「谷」より「懷」に懸けて温雅なる色合のハボタン又はオトメツバキを入れるのがよい。

◎ラウバイ、ナンテン、ス井セン、レイシ

一畫題芝仙祝壽の意に因りナンテンの幹に曲あるものを以て眞位とし其姿勢に依り最初に挿法を定め之れにあしらうラウバイを撰みて行位を作りス井センのなるべく小葉のものにて中間「懷」の位置より「谷」及び草位を作るそして「草」の控として相應の大きさの紅レイシをあしらうのである器は白磁より

りは澁味のある伊部焼のようなものがよからう。

◎マツ、タケ、ムメ、シユンラン

一四友の意に依りマツ、タケ、ムメを百六十八頁に述べた如くに活けシユンランを草位の控に入れるのがよい。

◎タケ、ムメ、キク、ラン

一四君子としてはムメの古木の枝振を選び眞位並に行位を作り其「眞」行位の中間「懷」よりタケを順に低く入れ、草位にはシユンラン又草位の「控」にはキクを入れるがよい、然し此盛花は枝振によりタケとムメとの位置を轉換するのもよからう、之は手型第十一挿法を適用する。

◎センリヤウ、ス井セン

一手型第一挿法によつて赤實のセンリヤウで眞位及び行位を入

れ、草位と草位の控にはス井センを入れる。

◎キンメイチク、キス井セン

一キンメイチクを眞位及び行位に又た草位にも極く瀟洒に入れ草位の「控」及び「懷」には花の小さいキス井センを見隠れに入れるのがよい。然しタケは盛花としては絶対に眞直に活けるが故に今此の材料を以て手型第一挿法に據つて活けるさきには其の梢の方向に注意せねばならぬ、器は滋味のものがよい。

◎ネコヤナギ、ヤブツバキ、ス井セン

一ネコヤナギを以て手型第一挿法に依り眞位及び行位を活けヤブツバキを「懷」より順次に谷に低く又一段高く草位を入れ「控」にス井センを入れる。之は平凡なる色彩であるが初心

者練習の爲めに載せたのである、之にヒカケカツラをあしらう。

◎カラモモ、アブラナ、ツバキ

一此の節よりは漸次に洋花が出る、就ては初心者直ちに色彩本位のものと思ひ浮ぶであらうが色彩さ云ひ自然と云ふも容易に會得するここがむつかしいものである、依つて色彩のよいもの凡そ三色くらいで活け上げるのが宜しい。そして地方別はあるが、此頃は先づモモの節句である。モモには總じて眞直の枝振のものが多く盛花に用ゐる事は風致に乏しいから其中で割合小枝のあるカラモモを以て手型第三挿法に依つて活けるさきには挿畫のナンテンの型に倣ひ其行位の幹の寸法を短く切り下げ、そして草位の枝振りにはナンテンの行位のも

のご同じような姿のものを使ふのである、然し此全型を俯瞰するときは原型（手型第一挿法）と同じ配置法である依て「懐」「谷」等にはツバキ、アブラナ（ナタネの花）の類をあしらうのがよい、又手型第十一挿法に依つて活けるときにはツバキを眞位のもの、「懐」に見へ隠れに入れ、草位にはモモの太き幹に小枝のあるものを入れるのがよからう。

◎クロチク、キス井セン、ボタン

一第六十二圖風靡體挿法第五例に依り富貴平安の意味に依つてクロチクを眞位及び行位に入れキス井センを草位に三本が五本くらいを入れ、又落ち込には春ボタンの中開き一輪尙草位の控にはクロチクか又はボタンの蕾を入れるのがよい、此器は青銅又は白磁にても薄型の一尺二寸くらいのもものが恰好で

あるがそれ以上の器に活けるときには假令ボタン又はス井センを多く挿してもクロチクは瀟洒にそしてタケノコを一本相當に丈高く「眞」の位置へ眞直に納め、床の大きさの調和を計るここが肝要である。

◎クロモジ、キレンゲツ、ヒラド

一第六十一圖風靡體挿法の第四例に示す如くクロモジとヒラドに似たキレンゲツ、ヒラドに就て述べるならば本法の活け方は同法第六例の草位の挿方の異つたところに氣附かれるであらうクロモジの木は少しも撓らぬものであるから出生其儘で草位をも挿し、全體の「眞」「行」草位を型り其「懐」へ見へ隠にキレンゲツ、ヒラドの葉の多いくらゐに附いたのと花とを挿したものである此の花器は白磁の少し薄形のもものがよい。

◎バラ、シユンラン、マガリツト

一バラを以て手型第一挿法により眞位及び行位を作り草位にはシユンランに實一本を添へて入れ、草位の「控」にはランの花を少い目に入れるのがよい。又全第十一挿法に據つて活けるには眞位にバラを行位にシユンラン草位に花頭の短いマガリツトがよからう器は一尺迄の小形のものがよい。

◎アカシア、ハマギク、ヒメユリ

一第三十八圖はアカシア出生其儘を大活けにしたもので落ち込みにハマガイク、尙ほアカシアの間にヒメユリを少々あしらうたものである、器は可成滋味ある支那焼の水盤がよい。

◎アカシア、ハボタン、マガリツト

一アカシアを以て風靡體挿法第一例に據つて風姿面白く三才を

作り「行」「草」位の中間低く「谷」には餘り艶麗でない色のハボタンを入れ、アカシアの「懷」より漸々に低く又ハボタンの間にも疎にマガリツトを配合するのである、器は一尺一寸くらいのものでないに活け難い。

◎ヒガンサクラ、ハボタン、マガリツト

一手型第十一挿法に據りヒガンサクラを以て「眞」「行」「草」の三位を作り、三位の中間「谷」の位置にハボタンを低く入れ其間へ疎にマガリツトを配合するのである、器は尺一寸以上が相應しい。第二十七圖を参照せられたい。

◎カヘデ、ヒカゲカゾラミ (タンポポ、コンギク) か又は

(マガリツト、スミレ)

一若葉カヘデの立姿の枝にて眞位と行位又た平遍な掬ひ形の枝

を以て草位を作る、此花型は手型第三挿法に據り下部には低くコンギク（方言ミヤコワスレ）を入れる。根方にはヒカゲカツラをあしらひ、そして器の前寄り片隅にタンポ、一輪か二輪之にも亦ヒカゲカズラを、あしらうていれる。自然の色彩として誠に優美に見ゆる、又コンギクの代りにマガリツトを使ふ場合にはタンポへをスミレと替るのがよい。器は小判形其他長方形のものを使ふ。

◎ナツハゼ、ジュンラン、コンギク又はサンギク

一手型第十一挿法により眞位、行位をナツハゼの紅葉青葉取交せて活け、草位にジュンランを入れ、眞位の「懐」見隠にミヤコワスレ又はサンギクを漸々低く「谷」へかけて入れる。これは自然本位の活方である。

◎アスパラガス、フリジア、枝ハボタン、マガリツト
アフヒ

一手型第一挿法に依りアスパラガスの腰莖の強きもの二、三本で眞位を作り、之にフリジアを添へ、枝ハボタンで行、草位を作り之に疎にマガリツトをあしらひ其ハボタンの「懐」より「谷」へかけてアフヒを少しあしらうがよからう。

◎サクラミ（ツクシ、タンポ、スミレの類）

一總ての植物が陽氣に伴れて開花の季節に入る、就中サクラは我國の表象として賞美されるが俗に云ふボタンサクラは盛花用としては花其のものが餘り艶麗なご其の樹の出生として恰好の枝振が少いのご假令恰好の枝があつても花姿の艶々した、め成るべく、あしらいの花は淡白なのがよい、依つて此

花を盛花とするときには枯れ幹其他枝振の面白きものを選び
 第六十四圖意匠挿法第一例に依りツクシ、タンポへ、スミレ
 の類をあしらい春の氣分を表らわすのがよからう。尙ほ其枝
 振りが手型第一挿法に據つて相應しいときは草位の、向ふ控
 にシユンランを入れ又手型第十一挿法に適すると思ふたとき
 には「懷」にキセンリヤウ、草位の「控」には尙且シユンラ
 ンの如き幽雅な物を挿すのがよい。此の場合に花器は少々薄
 手の地味な色合のものがよからう。

◎ギヨリユウ又はイトヒバミスカシユリ

一ギヨリユウ又はイトヒバの類にて手型第一挿法か又は風靡體
 挿法第五例に據り「眞」「行」草位を作り、スカシユリ三本を
 「懷」「谷」草位の控この三箇所へ入れるのである。器は一尺

くらいの白の丸形がよからう。

◎ポタン、マガリツト

一第六十圖風靡體挿法第三例の丸型荒目の籠にポタンを活ける
 ときは眞位に中開きのもの一輪に恰好よく小葉をあしらい、
 行位と草位には其の蕾か又は葉のみを入れ、草位と行位との
 間即ち落ち込みには白ポタン一輪を入れるのである。然し眞
 位に使ふた中開きの花は籠の椽て見切られぬくらいに高くし
 又行位と草位の葉の先は籠の目より少々づゝ出る方が風情が
 ある又落ち込みに桃色、紫等のものを使ふ場合にはマガリツト
 を少し配合するのもよからう。

ヤマブキ、シネラリア

一ヤマブキを手型第十七挿法に依つて眞位、行位を作り草位及

び草位の控にはヤマブキの黄色と調和のよい色のシネラリアを入れる、器は一尺ぐらいのものでよい。

◎アマリリス、キンセンクワ、ヒアシンス。

マガリツト、フリジア

一第二十三圖手型第十一挿法第二例に依りアマリリスにマガリツトをあしらい之れにて眞位を作り、行位のフリジアの下部には二、三のキンセンクワを入れ、そして草位には紫か又は其他配色のよいヒアシンスを入れる、尙ほ「谷」にはキンセンクワを入れるのである、器は一尺ぐらいの白磁でもよからう。然し何れの挿法に據ることもアマリリスの使ひ方を眞直に挿すことは風致に乏しいものである、依て此花は手型第七挿法の第一例を應用して可成斜に使ふのがよい。器は丸形九寸

くらいでよろしからう。

◎ユキヤナギ、アマリリス、キンセンクワ、フリジア、シクラメン

一前條の眞位にアマリリスの挿法は手型第十一挿法によつたものであるが今此の室咲きユキヤナギを以て眞位とするときは手型第十挿法により其根元にキンセンクワを使ひ行位にアマリリス之れに一本のフリジアを添へ又草位にフリジアを納れ「谷」其他の低き所に紫色シクラメンをあしらうのである器は平籠又は白磁丸型の一尺ぐらいのものでよからう。

◎チユリツブ

一チユリツブの花を一尺迄の丸形の器に手型第十七挿法(第四十一圖参照)に據り活けるときは、花全體が優美な出生であ

る、依て餘り曲げ撓めせず直立の儘で活ける、其中で花莖の餘り長いものはカキツバタの花型の如く花莖を切り下げ其花色の配合によつて瀟洒淡泊に又艶麗華美に活けるに恰も色彩に満ちた花園を連想することが出来る。然し此活け方にも草位の「控」の花を奥深く挿すことを忘れてはならぬ。又器の色合は花が淡白な白、桃、黄色なぞの時には朱泥の如きものを用ゐる丁度支那風の畫に見る如く又花が艶麗な赤、紫又は班入の如き色合であれば白磁を用ゐると洋式粧飾の卓上にも相應しからう。

◎ボケ白ツバキ又はキンセンクワ

一眞紅色のボケの立姿の枝振を以て手型第九挿法（第十九圖参照）に據つて「眞」「行」「草」の三位を作り「低い目」「懐」に

白ツバキの單瓣のもの二三輪又はキンセンクワを入れる器は地味な鐵鉢形がよい。

◎マツ、ツヘジ、シユンラン、ヤブカウジ、ヒカゲカツラ

一マツを眞位に、芽出しツヘジを行位にシユンランの實あるものを草位に活け草位の「控」にはシユンラン又谷の位置其他に三、五本のヤブカウジを入れる。之は叢生體を加味した手型第一挿法に據つて活けるのである。器は成るべく薄形のものを書き水際にはヒカゲカツラを、あしらふがよい。然し此の挿し方に使ふマツもよく注意しないに叢生の自然を忘却し自然本位とも色彩本位とも見えぬやうなものが出る。

◎ハナシャウブ、マガリツト、紅白アネモネ

一眞位及び行位にハナシャウブを活け、草位にはマガリツトを

入れ。行位、草位の中間低く「谷」には赤のアネモネを使ひ此花とマガリツトは區劃をせず白の花と赤の花とが少し入り交るくらいにして又ハナシャウブの行位にも三、五輪のマガリツトをあしらふのである。之は手型第一挿法に據つた活け方である。

◎ヤマザクラ、シユンラン、コンギク、ヒカゲカツラ

一 茗附ヤマザクラの成るべく幹のもの二本か三本で意匠挿法第一例によりて丈高く活け上げ。其花が非勝手であるときは反対の側、即ち器の向つて左寄りに一株が二株ほどのシユンランを全部の花型の草位に入れる。そして此シユンランとサクラとの間は成るべく廣くして其中間奥深くミヤコワスレを疎にあしらい總體の花の根元にはヒカゲカツラを布つめるの

である、器は薄平盤を使ふのが良からう。

然し此挿法のサクラの行位の梢は草位のシユンランを九十度の位置に納める爲め普通より少し前勝手に向けるのである。

◎ビハ、ナデシコ又はガンビ

一 ビハを手型第四、第八、第十一又は第二十二挿法に依り色替りのナデシコ又はガンビを草位又は草位の「控」に配合するのがよい。器は第二十二挿法の淺手のもの、外は惣て少し深手のものがよからう。

◎モクレン、カイダウ、ボタン

一 玉堂富貴の意に由りハクモクレンを以て眞位を入れ行位にカイダウを入れ草位にはボタンの蕾を入れる尙ほ此蕾とカイダウの間「谷」の處へボタンの開花一輪を入れると優艶なる花

型が出来来る。然し此花の取合せは巻頭花卉の撰擇に就ての項に説く如く色彩としては花色の差し合はぬ様に心掛けねばならぬ尙ほ畫題としては右の三種を撰んだのであるが其内カイダウは除いてもよからう。器は丸形一尺二寸くらゐを標準にした。(手型第一、第十、第十一挿法を適用してよからう)。

◎ツクモ、ナデシコ、又はコンギク

一手型第二十六挿法(第五十六圖参照)に依り本勝手に三才の上下の間隔を多くしてツクモを入れ、非勝手右側にナデシコ又はコンギクを手型第十七又は第十九挿法に依つて活ける

◎ツクモ又はフト井とカキツバタ、コオホネ

一第五十七圖三體形成挿法の例に依り眞位にツクモ、フト井の類と草位にコオホネ、カイウの如きものは二種共前條の挿法

に依つて活け行位カキツバタは手型第一挿法に依つて活けるのである、其葉組は(二二四頁参照)然し此挿法の中でフト井又はツクモは他の二種の花よりは主たる眞位に活けるものであるが、筒様の類のものは本勝手、非勝手共に任意に活けることの出来るものである、依つて先づ最初行位、草位に使用花もの、葉、及び花の姿によく注意し本勝手、非勝手の何れの挿法に適するかを見定めて眞位のもの之に倣ふて活けると全體の花型が引立て見へる。

◎ユキヤナギ、カキツバタ

一手型第五挿法に依りユキヤナギを以て眞位並に行位を作り其懷及び草位には同法俯瞰圖の全型と同じ型にカキツバタを入れる。

◎ボケ、キス井セン、シユンラン

一ボケを主として手型第三及び第十挿法により枝數一本か二本くらゐのものを以て「眞」と行位とを作り草位にはシユンランを入れボケの「懷」「谷」及び「草」の控等に三本か五本の花數を少くしたキス井センを丈け低くあしらうのがよい、器は白磁のものより濫味の色のものが適するであらう。

◎形状レイシの如きマツ、フジ、アセビ（一名

アセボ）の内一種を主としたるもの

一手型第六挿法に依り掲題三種の内其姿勢が菌類のレイシの如き姿のものを以て瓶花の主位即ち手型としての眞位に納めそれがマツなれば行位にハボタン草位に黄センリヤウ又フジなれば草位にカキツバタ尙常緑アセビを以てするさきには其若

葉が恰もサツキの桃色花の満開のやうなときもあるから其時季相應のもの、色彩を見計ひ行、草位にあしらうのがよからう器は挿畫第十二圖に示す如く陶、銅器籠類にしても廣口壺形其他之に類したものは又は主位（眞位）のものが丈け長く發育したものとときには長手の器がよろしからう。

◎トケイサウ、アサガホ、テツセン、ノウゼンハレン（金蓮花）

一是等蔓性草花は金蓮花の外凡て他の草木に攀登して生育するものであるが活け花としては此の内一種を以て稀には枯枝なぞに卷附て手型第十七及び同第二十挿法により花葉などが餘り裏向きにならぬやう注意して活けるのがよい。

◎バラ、キスゲ

一手型第十二挿法第七例に倣ひ帯紅黄色のバラを以て活けると
 きには花数を少く開花を「真」「行」「懷」「前添」の主位くらゐ
 に使ひ草位はキスゲを以て作り之れの「前添へ」及び「谷」
 には半開又は蕾のバラを入れる。器は淺手の地味な色合のも
 のがよい。(第三十圖参照)

◎カヘテ (枝もの)

一カヘテの挿法としては手型第十七、第二十三挿法の類の如き
 横勢活け、又は懸畦體による枝振りのものを以て自然風姿を
 現すことが出来るのである。第十八圖の手型第九挿法例畫の
 如きは著者の拙筆を以て手型に基き畫いたものであるが此挿
 畫としては左寄り行位のものとは他の切り枝を以て入れ「真」
 「草」共一本のものに對し三才の格を備へたものであるが若し

此カヘテが一本の幹で筒様の姿のものなれば盛花として一顧
 の價値なきものである。

◎ビヤウヤナギ、ヒメユリ

一ビヤウヤナギを以て手型第五第十一又は第十九挿法に依つて
 活ける。其内第五挿法の如きは能く此花の自然美を發揮した
 活け方と思われる、依てその挿法の説明を能く會得してヒメ
 ユリ三、五本を青葉の下蔭即ち「谷」又は「懷」の箇所に一
 二輪の開花を見え隠れにあしらふのがよい。(第十一圖参照)

◎叢生ユキヤナギ、ヒメユリ、又はコンギク

(ミヤコワスレ)

一手型第十二挿法に依りユキヤナギ一種を以て叢生の自然を現
 はしあしらひごしてはヒメユリ、ミヤコワスレの類を「谷」

及び其他の所へ疎に五六本を入れるのである。そして此「眞」草位の根方其他の挿し方をなるべく自然的にするがために此二位の「前添へ」等は、その内側より斜に前方に挿し又其「前添へ」の根方の外側へ丈の低きものを挿すのである。兎も角其花が生け垣の如く併立せぬやう根方を雁行に做うて活け凡ての根方の花を取除け新芽はなるべく取らぬやうにせねばならぬ。尙眞位のもは餘程前寄りに活ける方が好い（第二十八圖参照）

◎ビハ又はヒラドとカキツバタ

一ヒラドを以て手型第一第四第八第十一及び第十七挿法に依つて活ける。其内第四挿法は此植物の通有性たる姿勢で盛花又は瓶花としても恰好の就き難いものに適用することが出来る

依つて第四挿法説明及び第九圖ビハの挿法を参考として會得せられたい。尙カキツバタは草位又は第十一圖のビヤウヤナギの「谷」に入れたヒメユリの如く見隠れに活けるのがよい。

◎チヤボヒアフギ（自然活け）

一チヤボヒアフギを以て手型第一及び第五挿法に依つて活ける前者は第一圖に示す如く斯道初心者の模範として形態の便宜上眞位の花の挿し方の如きは幾分其もの、生育状態を無視した挿法である。然し挿畫第十圖に示す第五手型挿法に依つて活けるときは此花自然の艶曲なる風姿を充分に發揮することが出来ると思われるが、是こても餘程其花の向勝手及び葉尖等に注意せぬと折角の花も一向に見映のせぬものである。器

は少し深手のものがよい。

◎カヘデにカンギク又はコンギク（ミヤコワスレ）

一凡てカヘデは盛花としてよりも景花又は瓶花としての應用材料である依つて割合面積の狭き器に盛花として挿すときには挿畫第十八圖の如く其風姿が餘り恰好よくすぎて他の草花のあしらひやうもなく盛花として一顧の價値なきものが出來ることがある。又是に反して廣き器に意匠花としての場合には其葉の遍々とした姿勢が他のあしらひの花と相俟つて夏期清涼の情趣を現はすものである。依つて盛花材料としては第五十三圖に示す如くに自身採取のときにはよく枝振り、大いさ及び器、あしらひの調和をよく考へて活け尙其枝に立ち葉の多いときには風情に乏しいゆへに之を取拂はねばならぬ。

◎ツヘジと（ヤブカウジ、ヒカゲガツラ、稚マツ、シユンラン、落葉）

◎ヲミナヘシトと（キヤウ、カルカヤ）

一是等材料の主たるツヘジ（淡紫色の小花のもの）は著者が嘗て西の宮香櫛園方面赤土質の風當り強き山に自生したものを以て（第五十四圖参照）自然本位の挿法即ち手型第二十四挿法に依つて活けたのである。此挿法の美點は其説明にある如く其草位自然の枝振を主とし隨つてあしらいの如きものも此ツヘジ周圍自生の稚マツ、ヤブカウジ、ヒカゲガツラ、シユンラン其他落葉を用ゐ、又其花の枝に四五のメマツ（アカマツ）の枯葉が懸つてあるのも情趣の一つを添へるものである又ヲミナヘシの曲ものを主としキヤウ、カルカヤ其他のもの

のをあしらひ草もの一式にて活けるのもよからう。然し是も野生もの、材料でない活け難と思われる。

◎ナンテン（斜に發育したもの）とカンギク、ガンピ、

バラ、ナデシコの類一種

一斜に育つたナンテン三本を以て挿畫第五十圖手型第二十二挿法第一例に倣ひ活けるときは此所に説明するまでもなく其手型及び俯瞰圖に依て了解の出来ることと思われが、本法活け方も他のナンテンの條に述べた如く能く眞位の幹の左右勝手の向き方に注意せねばならぬ。そしてカンギク又は其他一種のものにて「谷」の所へ手型第一挿法により其もの行位をナンテンの「眞」と「草」との中間位置に流して入れるのである。

◎タマシダ、赤色アフヒ、マガリツト

一タマシダを以て手型第五、第七又は第二十挿法により其「眞」「行」位と「草」位との間を廣くし流儀花のオモトの活け方に倣ひ赤色アフヒを以て其實の如く「懐」「谷」等に入れアフヒの周圍等に高低疎にマガリツトをあしらふのである。然し此花型は小形でそして濃艶なる色彩本位である。依つて器は白磁より澁味のある小形角ものが相當しからう。

◎シヤガ

一シヤガ一種を以て手型第十二細法による自然本位の盛花に活けるときには花戸で求めた材料にては其葉の根元に使ふ小葉等が充分でないからなるべく自身採取のものを以て全型を作り其花の挿し方は餘り三才の位置に拘泥せず只花莖の目立

つて偶數にならぬくらいに注意して何處にても葉の繁つた間より高低にあしらうのが自然に近い活方である。又採取のときにもよく氣を附けるご其葉が鳥の翼の形で眞直に生たものもあるからよく生育状態に注意して其翼状のもの（挿畫に黒點のある葉がそれである）を「懷」又は「草」の主位に使ふのがよい。又此花は上部より下部のもの迄が日々順位に見劣するこごなしに最終の花も鮮かに開いて挿花としては普通の草花と違ひ二週間ぐらいは充分樂むこご出来る。器は二尺ぐらいの白磁のものが適當と思われる。

◎アマリヘス

一アマリヘスの一種活けとしては手型第三第七挿法に依つて活けるのがよい。然し何れの挿法に依るとしても此花一種にて

は其花葉の姿が餘り單調であるが只だ此等二種活け方の原形と看做すべき花形である。依つて「懷」「谷」等には他の色彩の調和よき小花の「あしらい」を使ふのがよい。器は深手の壺形に近きものがよからう。（第十三圖参照）

（注意）

一本草は球根種であつて花莖と葉とが別個に發育し花莖は殆んど直立に近き姿で其花は莖頭に花數の方向に假令二輪附なれば両方に三輪附なれば三方に葉の割合に花が大輪であるから之れを出生其儘に挿花とすることは自然に拘泥するのみで却て無趣味のものである依て盛花に限らず瓶花としても其自然風姿を没却して**ス井セン**の如く葉間に花莖をあしらい幾分横姿に挿すはうが風情ある姿勢となる。

◎シヤクヤク(大輪)

一シヤクヤクの大輪もの三、五本を以て手型第七挿法に依つて活けるときには説明及例題の挿畫により「眞」行位の花は易く了解の出来ること、思ふが草位の花は半開のもの「谷」の所へは蕾のものを使ひ此二タ所の花は葉を以て見え隠れにして陽に見えぬくらいに活ける方がよからう。(第十五圖参照)

又此シヤクヤクを以て手型第十二挿法の内第二例皿活け法に依るときには「ユノス」ニ頁キクの條を参考として活けるのがよい。然し其内にも注意すべきことは此シヤクヤクの花頸は割合に長く且つ葉が亂雑なために活け上げた儘で見苦しい場合がある。其時には花頸又は前寄の疎らな所を目立たぬやうに他の恰好よい葉にて補足するのがよい、又補ひ葉には赤色の

花のものは小葉で惣体に質がよい、依て活けるときに最初より切り拂ふ葉を大切にして豫備として除けて置くことに心掛けねばならぬ。

◎アジサイ、カキツバタ、ユリ

一此三種の挿法は全形を手型第一挿法に依つたものである今其花の「眞」「行」「草」の箇々の挿法に就いて説明するとカキツバタを以つて少し丈高く手型第一挿法により眞位のものを作り、次にアジサイを以つて第十一挿法に依つて行位のものを作る。此アジサイの草位に當る花又は葉をカキツバタの草位のものをして圍むくらゐに入れる、筒様に挿すときにはカキツバタの草位ものは丁度全形の「懐」の位置になる、そして又ユリを以て第十七挿法により草位を作るのである。此ユ

リの眞位まゐのものものは全形ぜんけいの草位くさゐ控ひかの花はなに當あたる。(第四圖參照)

◎フジ、キンセンクワ、カキツバタ

一横姿よこすがたのフジを以もつて小判形せうげんがた其他たの平水盤へいすゐばんを使つかひ手型てがた第六挿法だいろくさつぽうにより器うつわの片方かたがたに活いけ「谷」及び草位くさゐにキンセンクワをあしら
い其反對いはんたいの方にカキツバタを以もつて手型てがた第十一挿法だいいちさつぽうによつて活
けるか又其フジが立姿たちすがたで眞行草位まぎやうくさゐを備そなへたもの、ときには風
靡體挿法ひびたいさつぽうにより其草控くさひかにカキツバタを手型てがた第一挿法だいいちさつぽうによつて
活いけるのである之は長き筒形ながきとうがたの手附籠てのつけかごがよからう。

◎コデマリミヤマ、ミヤコワスレ、ヒメユリの類一種

一コデマリを以もつて手型てがた第五挿法だいろごさつぽうビヤウヤナギの挿さし方かたにより其
「懷」谷なごころ等にアヤメをあしらひ又た第十二挿法だいにじふにさつぽう及び第十九挿
法ぽうにより「谷」の箇所へコンギク(ミヤコワスレ)又はヒメ

ユリを疎そにあしらうがよからう。

◎カキツバタ

一カキツバタを主まとして活いけるならば出生しゅつじふの花はなは花、葉はは葉はこ
して其儘ままの株かぶを花器はなうつわ相應おこに寸法すんぽうを縮小しゆくせうするに止め花はなと花はなとの
間まに葉はをあしらひ「眞」行まぎやう「草」の三位さんゐを作るのである。然しか
し此この花型はながたは手型てがた第一挿法だいいちさつぽうに據よる自然本位ぜんぽんゐの活いけ方かたであるか
ら「懷」より低く草位くさゐとの間ま即ち「谷」の位置ちゐには、成なるべ
く蓄たくわのものを使つかひ餘り満開まんかいのものを花首はなびし丈だけ活いけることは不
自然ぜんぜんである、尙或時なほあるときは其花莖はなはらに附つた葉は其儘ままでは少すくくて困こまるこ
云ふ場合いふばあひには別に葉組はがみをせねばらぬ。其葉はの組方がみかたは圖ずに示しす
如く吾人の着衣ちやくいの襟えりの合せ目あはせめの如く五枚葉ごまいはなれば最初さいしゆは右、
次つぎに左、次つぎは右次つぎは左に次第しだいに組み上げ中央ちゆうおうに一枚若葉まいわかを



葉巢虫



◎カイウ、シマアシ、ニムファイア
一カイウを以て小判型二尺の水盤に勢良く器の前寄片側に手型
第三挿法に依り眞位に花を丈高く之に葉を添へ、行位にも花
に葉を添へて活け、草位は葉斗りを入れ、そしてシマアシの
眞位を、カイウの眞位の後側に又カイウの「懐」にシマアシ
の行位を入れ、又草位のアシはカイウの草位より少し隔て

丈高くして入れる。尙此アシの草位とカイウの草位との中間
にニムファイア（和名スイレン）を手型第十八挿法に依て配置
するのである。

此全型は挿畫第二十九圖手型第十二挿法に依た活方である。

◎キソケイ、カキツバタ

一キソケイを以て手型第五挿法第二例に依り三才を作り其「谷」
の箇所にかキツバタを同法の型に依り其眞位のものにキソケ
イの「懐」に入れ草位はキソケイの「草」の向つて右依りに
入るか、又はキソケイ草位の全部をカキツバタのみで入れる
のがよい器は一尺くらいの浅手のものがよからう。

◎アヲキ、ハマギク、又はナデシコ

一手型第四挿法又は同第十一挿法に薙り成るべく小葉のアヲキ

を以て三才を作り「谷」又は草位の「控」にハマギク又はナ
デシコをあしらう。

◎トクサ、ナデシコ、又はコンギク

トクサを以て手型第二十六挿法によりて非勝手に活け片方に
ナデシコ又はミヤコワスレを同第十七挿法に據つて本勝手に
入れる、此ナデシコ又はミヤコワスレの行位の花は全型の草
位であることを記憶せねばならぬ。

一重復を厭はず今一言述べておくことは此頃は漸次、花の全盛
期である。又色彩本位の（シーツン）と云つてもよい。然し
此の時期の花の活け方は前に云つた如く、能く注意しないと
只目を花鋪の花棚の色彩に捉はれて紅、黄、紫、白など色彩
のみの花卉を選び、之を活け上げてても今一入の思ひがするの

は、植物の形態及び其の出生等に注意せぬ結果である。

◎マツ、カキツバタ

一第五圖マツの活け方は池畔閑寂の有様を寫したもので、なる
べく枯葉を取らず其儘に活ける、又片方のカキツバタの活け方は
其草位に折れ葉を使ふてあるが、マツとの調和としては立ち
葉の方がよい。尙挿畫第六圖のマツの活け方は手型法に依り
其一例を示したものでマツとして筒様なる器に二本も挿すこ
ごは不恰好であるが、偶には挿畫に表した様なマツもあつて
草位を剪り下げること全體の調和上、丈が低くなつて困るとき
に餘儀なく右の挿法を適用したもので、行位は枯幹でも差支
へなく、又其枯幹が餘り力の弱き（細き）ときにはカキツバ
タの葉が蓄で其力を補ふのがよい。

◎アシ、レン、ヒシ、ツユクサ、ウキクサ

一初夏の候、自然の嗜好に適するため水に因んだ活け方を云ふ
 こ、池沼の畔の風景を作るのである。それはアシの新芽が一
 尺乃至一尺五寸くらの高さに生へてゐる中に、去年の枯穂
 が二、三本疎に抽んでゐる、之を先づ二尺五寸以上の小判
 形の器に、風靡體挿法に據て活け、レンの若葉も三、四枚風
 に漂うて居る（此レンの葉は手型第十八挿法に據り眞位の葉
 はアシの「懷」に納める）水面にはヒシの株二、三點又色彩
 としてツユクサ（紫色の蝶形花）をアシとレンとの間に一、
 二本入れる之れは第五十九圖に示した自然本位の活け方であ
 る。今此處に掲げることは技術上尙早い思ひはあるが之も漸
 次趣味向上の資として述べたのである。

◎タイサンボク又はオホヤマレン

一タイサンボク又はオホヤマレンの如き純白な大形の花を一尺
 くらいの澁味のある器に枝振りを好んで花を少い目に淡白に
 挿し前より見て其花の輪廓に懸るか否やの程合に或る一方よ
 り餘り艶麗でない色の洋花でも一輪遍々小蝶の戯れるが如
 き風情にあしらふのも亦一興である然し此の挿法は枝振にも
 よるが成るべく手型第十一挿法に據つて活けられるやうなも
 のを撰ぶのがよからう。

◎シダ、ハマギク

一シダ一式にて第四十三圖手型第十七挿法第五例に據つて挿し
 疎にハマギクをあしらひ水を澤山に見せ、其の根元はシダの
 枯葉を低く入れると自然本位の清酒な活け方である。

器は支那焼の「なまこ」色が其他地味な薄物がよい。

◎ランタナ、ベコニア

一手型第一挿法に據り黄色ランタナを眞位及び行位に入れ、ベコニアを草位又は草位の控に入れるのがよい。器は一尺ぐらいのでよからう。

◎ナツバゼ、ノギク又はコハマギク

一手型第十七挿法に據りナツバゼの紅葉したものを眞位に青味勝ちのものを行位に、又少し紅葉したものを草位に活けて三才を作り「行」「草」位の中間の落ち込、及び草位の「控」にはノギク又はコハマギクを少しあしらふのがよい。然し此花は單純なる自然本位の活け方であるから、ナツバゼの活け方を流儀花のバランの眞位と行位との葉が向ひ合せになる如く眞位の

枝を無理に撓め、行位の枝と相對するが如きは不自然であるばかりでなく不恰好のものである依て第四十三圖の第五例を應用して水際にはヒカゲノカツラをあしらふのがよい。

一参考として述べてをくが挿畫第八圖ナンテンの活け方は出生其儘を技巧を加へずして餘儀なく挿法に當て嵌るがために草位にはシダを使ひ其形體の美を顯した活け方であるが、今右のなつはぜを以て此ナンテンの挿法に依り自然及び色彩本位の何れの挿法に應用するにしても餘程考へねばならぬ。

◎タケ、レイシ、オモト

一萬年如意に型りタケを以て眞位並に行位を入れ草位にオモトを入れ、草位の「控」に紅色レイシを添へる。之は手型第一挿法に據つた活け方である。

◎ギヨリウ又はイトヒバミアシ、ナデシコ、カハホネ、ウキグサ

一此の頃は挿花の保ち難い氣候であるから花は成るべく朝の内
に用意して活け、又た活けた花は器物を損ぜぬやう其儘夜露
を受けると翌朝其花は生々とする。

今此處にギヨリウ又はイトヒバの類を用ゐて川邊に靡くヤナ
ギと看做し根元にはヒカゲカツラを布きアシ或はナデシコの
類をあしらひ、小川に型つた水の方にはカハホネの成るべく
小葉のものにて手型第十七挿法に據りて活け、先に活けた木
と此カハホネの間の水面にはヒシ又は他の萍の類二三点を浮
かすのである。此の挿法は自然本位と云ふよりも意匠挿法と
云ふのが至當であらう、器は薄平盤を使はねばならぬ。第六

十七圖を参照せられたい。

◎ユキヤナギ、ヒメユリ

一青々した葉のユキヤナギを主とし手型第五挿法第二例に據つ
て中間懐にヒメユリ五六輪（開花二三）を入れると極く瀟洒
なものが出来る。器は深い小振りの鐵鉢型のものがよい。

◎チヤボヒアフギ

一手型第一挿法に據りチヤボヒアフギを以て三才を作り眞位行
位の中間懐より順次に低く尙草位の控共にコギクを配合する
のがよい。器は一尺くらいがよからう。第一圖を参照せられ
たい。尙圖中其葉に○印あるものは別に補足したものである

◎シユカイダウ、ユキヤナギ

一手型第二十挿法シユカイダウを以て低い目に眞位及び草位を

入れ、ユキヤナギを以て行位流しの法により瀟洒に活け、之を床脇の地袋の上に懸壁式に置くのがよい器は滋味の薄物が相應しい。第四十七圖を参照せられたい尙挿畫に據るこシユカイダウと行位のユキヤナギとの部分が餘り割然としてあるが之れは畫の拙い爲である、依てシユカイダウの「懷」にも疎にユキヤナギをあしらうがよい。

◎ジユスタマ、ムクゲ、イノコログサ

一風靡體挿法キクの活方により小葉のジユスタマを眞位に少し丈高く行位は普通に入れムクゲを草位並に草位の「控」に入れ眞位の前添、又「懷」の箇所に紅葉したイノコログサ三本程を添へるのがよい器は一尺くらいの薄手のものがよからう。

◎マツ、ツツバキ

一松齡鶴壽を意味して手型第八挿法によりマツを以て眞位及び行位を作り、草位にシロツツバキを入れる。器は大形の滋味のある薄物がよからう。

◎氷、コンテリク라마ゴケ、カイウ、又はカハホネ

一第六十六圖の意匠挿法に示す如く氷の塊二三個を岩に見做し之にク라마ゴケ又はヒカゲカツラ等を被せ片方には手型第七挿法によりカイウ或はカハホネを入れる之れは正式の座敷の床に置くことは出来ぬが盛夏の候待合室等に之を飾るときは草花も保ち易く又來人の饗として即興の一つである。

◎ハギ、キ、ヤウ、ヲミナヘシ、カルカヤ、シダ

一此の五種を以て手型第七挿法第二例に依つて活けるごきには最初に其ハギの丈け及び曲り按排が器の大小によく調和する

か否やを考へ他のものも之れに準じそしてヲミナヘシの後口添又は「懷」には三五本のカルカヤキヤウ又水際にはシダをあしらひ淡白と活けるのがよい。器は小判形を使ひゆつたりと餘裕のある活方にせねばならぬ。(第十四圖参照)

◎ス、キ、オミナヘシ、キヤウ

一手型第三挿法によりス、キを以て眞と行とを作り眞の前添へ及び「懷」等にオミナヘシを高低にあしらい草位にキヤウを手型第十九挿法によつて活ける器は別に好まずともよからう。

◎ス、キ、ナデシコ

ス、キ、ナデシコ二種の挿法は手型原則に依り第五十二圖に瓶花として現はしたもので之は盛花として從令他のツユクサツキミサウなどをあしらうにしても余程の難題である。依て

之れ等の材料及び挿法としては瓶花として活けるのが至當であらう。

◎ナンテン、ヒアフギ、タマシタ

一少し反り氣味のあるナンテン二三本を以て三才を作り俯瞰して恰も「懷」の位置に低くヒアフギをあしらひ、そして片方にタマシダ、ノシラン、キンリヤウヘン、ゲルベラージの如きもの一種を低く活けるのである。尙又オモトを使ふときには「懷」のヒアフギは他の花ものご取替へるがよからう。(第八圖参照)

◎ヘチマ、花實あるものツユクサ、クサス、キ

一此ヘチマの如きものは花器との調和上餘儀なく手附平籠の類のものを使はねばならぬ活け方として大體には手型第一及び第十七挿法を撰み餘り其型に拘泥せず其蔓を其手に纏ひつけ

小き果のこきには之も共に絡らまし又大形のこきには「草」位流しの格を以て別に薄き敷板の上に他の置き物の意味を兼て其果を飾るのである。筒様に活けた上で「懷」谷等に極く淡泊さくサススキ、ツユクサの如き野趣あるものをあしらふのがよい此場合其籠の手を半分以上花葉にて隠すのは宜しくない。

◎クマザサ、クサアシ、シダ(小葉のもの)カワラナデシコ、

ミヤコワスレ(コンギク)コチャウカ、カンギク、ヒメユリ

ユキヤナギ等の内一種活け

一クサアシ又はコシダ等の被せかゝつた性質のものを以て第四十三圖の例に倣ひ活けるときにはシダなれば「懷」谷等に低く疎にハマギクの類をあしらひ、又著者考案蛇籠形花止器の四分目程を水上に現しカワラナデシコ其他前掲のなるべく一種

の優しき草物を以て立姿又は横姿に極く淡泊と郊外磧邊のしほらしき情趣を現はすことが出来る。

偕て活け上がった全體の美は最も插花の本領であるが然し本書載するところの插花の内此挿法は花器の調和を必要とするものは他になからう。之には白磁の細長き浅手の「イカ」の甲形のもの又なまこ浅手の水盤が最適と思われる。尙此ジャカゴの沈め方は、よく花席等にて景花なぞに斜に使うてあることを見受けるが、此使ひ方は餘り風景寫實に重きををいた仕方で隠當なる使ひ方と思われぬ。依つて花器の調和さしては此「イカ」の甲形等に限らずジャカゴ形の花止器は横一文字に使ひ又た小石なぞをあしらうのがよろしからう。

◎ニムファイア、ツユクサ、タデ

一此花一種のみを活けることは稀であるが第四十四圖は手型法に基き表したものである、其圖に高き巻葉より丈の低き花を眞位にしたのはニムファイア其もの、美の眞髓たる花を主とし巻葉は之の添に使ひ又た後ろの小葉は小指の位置に當つて「草」の控さしたものである。以上の配置法を以て此花を一層自然的に活けるごきには淺手長方形又は橢圓形の「ナマコ」水盤に片方には川洒れの柳杭二三本を高低にあしらうたものを眞位と看做し小葉のアシの類を添へ又水際に低くツユクサ、タデ其他池畔の雜草の類を極く少いくらゐるに入れ之に萍をあしらひ之等のものを行位とし、そして片方の草位にはなるべく小葉のニムファイアを配置するのである、此全形は第五十七圖三體形成挿法を應用して活ける。

◎ ヲギ、カイウ、ニムファイア、コンギク（ミヤコワスレ）、又はキ、ヤウ

一第六十五圖第三例の活方はヲギを以て眞位のものを作り根方の餘り繁つた葉は流儀花バランの虫喰葉の如く手を以て程よく破り取り之にミヤコワスレ又はキ、ヤウなどをあしらひ次に少し拈た幹で小葉のあるものにて行位を作る草位には小振のカイウを手型第十七挿法に依つて活け又花器の都合に依り「眞行」草との中間に色もの、ニムファイアを活けるのがよい

◎ ナンテン又はイトヒバにキスゲ、アスタ

一第六十七圖意匠挿法第四例の挿法に適ふたナンテン又はイトヒバを片方に活け根方にアスタ又は小菊の類をあしらひ反對の側即ちカハホネの位置にキスゲを以て此イトヒバと同じ非

勝手に入れる依つて此キスゲは挿畫のカハホネと反對挿法の形であるがこれを風靡體挿法により其「行」の葉先を左方に靡かして全形の調和を圖つたものである。器は壹尺くらの圓形か又は是以上の寸法の小判形の花器に活けるのもよからう。

◎ア ス タ

一濃色アスタの一種を以つて手型第十一挿法により少し小型のもの丸形なれば徑八寸くらの花器に活けるごきに此花の通有性ごして小花が莖頭に向つて順次に立錐狀に集合したものである。依つて之の一種活けとしては風情ある野菊の如き姿に作り換へねばならぬ。先之を斜に手にして莖の眞に秀て咲いた花又は周圍の正面及び下向の花を程よく切り取り上向の花を多く使ひ「眞」行「草」を活け上げ其根方の淋しく見えぬや

う小枝を以て「向ふ添へ」「前添へ」等を程よくあしらふのである

◎ハギ、ヒカケカヅラ

一ハギ一種を以て手型第十三挿法により大活けにするごきには器物の調和上材料の寸法をよく撰ばねばならぬ挿畫には骨法ごして割合大きく澤山に活けたものであるが普通は鉢植の根元より曲尺一尺より二尺までのものにしてしなやかに曲のあるものを撰み眞位のものゝ殆んど花術語の人差しのくらゐにまで正面向に挿し其他の「行」草位の配置は挿畫及び俯瞰圖によつて會得せられたい此挿法は餘り「懷」「谷」等を実際立て見へぬくらがよからう尙此挿花の根元にはなるべく新芽の丈の短きものを使ふて水際近く花のあるごきには其花を取除けねばならぬ器は二尺以上二尺五寸くらの水盤で少し深手のものが挿花

の保ちがよい。

◎マンキチスギ(阪地方言)スイセン、ヒカゲカツラ

一マンキチスギを以て挿畫第三十三圖に示すごとく手型第十三挿法により景花として活けるとときに其畫の如く只直幹のものを俯瞰圖によつて活けるのであるが景花としての要点は其全部のスギが殆んど同じ樹齡に生育した一箇の森林體を現はすのである依て假令遠方に見へる草位に使ふものも最近の眞位のものと同じ並木に見へるやうな小振のものをを用ゐる根元全面にヒカゲカツラにハナゴケ(ニホ)頁参照を取合して布詰め器の片方平野と看做す所には其平野に生て有るらしき矮小灌木又は梅などを丈低く自然生の如く活けるのである依て此景花挿法の場合に水仙其他の草ものを流儀花の格に入れるときには

其あしらひ一つを以て全形を毀すやうな事になる(此ス井センの活けやうは一セ三頁ナンテンとス井センの挿法の條に就て會得せられたい)

◎マツ(小葉の若松)ヤブカウジ、未生コマツ、フクジュサウ

一若松の挿法も前文スギのそれと餘り大差はないあしらいこしては未生の小松又はヤブカウジ等を使ひ一方の平地部にはムメ又はフクジュサウ二三本を手型第十一挿法によつて活けるのがよからう。

◎メマツ(矮少なるアカマツ)コハマギク、貝殻

一此メマツ活け方の心得は畧ぼ前條のスギ及び若松のそれと餘り大差はない然し景花としての意匠は前二種は森林の状態を現し此メマツは須磨明石邊の婉曲せる松の海岸を現したものを

である依て此活け方は挿畫第三十四圖ハギの骨法により眞位のマツは花術語の人指の位置を保ちつゝ其眞位の最上の梢はハギの梢の如く右方に少し振り向け順次に「添へ」「懐」「谷」「草」位のものまで眞位の梢の方向に随ひ又其梢の反對の方向順次に行位のものまでを活けるのである、そして根元は砂次に小石次に器の三分通りくらゐに水を見せ其水に近き所に盆石に使用ふ小貝殻又た根元の砂の所にはコハマギクを二三點淋しくあしらうくらゐであらう。

此景花に使ふマツはクロマツのはうがよいのであるが阪地近傍にては恰好のものを得ることは至難であるゆゑに餘儀なく此メマツを使ふたものである尙此活方は夏期の部に表すのであるが前條述ぶる如くスギ又は若松の活け方を讀者の参考と

して讀むに便利と考へられるから此處に前二法に續いて述べたのである。

◎アカバウ又は矮小灌木の如きケヤキ、ツゲの類一種と

あしらい

一此種材料の撰擇方法も亦二四四頁スギ説明の條を會得せられんことを望むのである卷頭挿畫第三十五圖に示す如くツゲ、アカバウ、ケヤキ其他矮小灌木の枝葉繁茂したるものを以て春郊疎林を現し又は冬枯枝幹のものを以て寒村小川の邊り木枯し路傍樹の風景を現すのである先づ春期の下草としてはヒカゲカヅラを器の七分通り布詰め所々にカニシダを添へ樹間疎に未生のコマツ、ヤブカウジ、小葉のシユンラン等をあしらい、そして器の片方平野と看做す所には小形にウメ又はフクジ

ユサウを活けるのである。

又た冬期木枯しの風景としては根元にハナゴケ(セロ)頁参照)それにヒカゲノカツラを所々に添へて布詰め下草として枯葉混りのカニシダ時候遅れのイナリヤマツヘジ(淡紫色小花のもの)ナデシコ、ヤブカウシ、未生の小マツ等をあしらうがよい、そして一方平野部には小型にカンボケ、ムメ等を活けるのである然し此の兩種及び他の景花としては其あしらいもの、色彩又は惣ての自然的調和が肝要である。

◎カヘデ(温室もの若葉)ミヤコワスレ、ヒカゲカツラ

ハナゴケ

一温室もの、丈の低き若葉カヘデを以て挿畫第三十五圖の例に倣て活け材料撰擇其他の心得は二四四頁マンキチスギ、二四五

頁メマツの活方を参考として熟讀せられたい立田川邊の風趣を現すのである此下草としてはヒカゲカツラとカヘデの根元に少々のハナゴケ(セロ)頁参照)を添へ樹間疎にミヤコワスレ其他時候の莖短き草花をあしらい右前隅より右後隅に涉り川邊と看做す岸には著者考案のシヤカゴ花止二三個を前面より見て横一文字にあしらうもよからう。此景花はよく花會にも見受る圖様であつて又主題に因んで大低はカヘデの葉を二三片水に流してあるが之れは餘り技巧を弄した活け方のやうに思はれるのみならず白磁の花器にカヘデの紅葉との調和が何にとなく落附かぬやうに考へられる。

◎ヨミナヘシ、カルカヤ紫白キ、ヤウ、シダ
一成るべく眞直にヨミナヘシを以つて眞位行位を作り眞位の花

以下にカルカヤを高低にあしらい。草位にギキヤウの紫と白
 を取り交ぜて入れる。又草位の「控」と「懐」とにも少しづつ、のナ
 デシコを入れ、水際にシダをあしらうのがよい。此花型は風
 靡體挿法に據つた自然本位の活け方であるから眞直な莖のも
 のを斜に挿すことは禁物である。器は小判型が好適である。

◎ハケイトウ、シラン、又はアスタ

一第三十一圖手型第十二挿法第七例に據つてハケイトウの色の
 よいものを三本色々に取合せ其内で太き恰好の良いものを眞
 位として丈高く入れ、行位も之に準じ草位は低くそして「懐」に
 草位の「控」にシランを淡白に入れる、又第二圖キクの活方を應
 用して落ち込の所へアスタの類を丈低く入れるのもよい器は
 前の挿法ならば少し深手のもの後の挿方なれば淺手のものが

よからう。

◎スヘキ、ハギ、キヤウ、ヨミナヘシ、フジハカマ

クズ、ナデシコ

一秋期草花の主題として用ゐるものは、七種である。此の草は
 是非自然本位の活け方に據るのであるが、今此處に筆を採つ
 て詳細に述べることは實に至難のことで、假令何は何の箇所
 に云ふても七種の内スヘキ、ハギの如きは大低一株となつ
 てゐてスヘキは自然立姿のものが多く、ハギには横又は垂れ
 たものが多い依て此の二種ものは挿法を指示することが出
 来る、此外の五種のもは他の草木と叢生のものが多く隨て
 其姿勢も一定してをらぬが、先づ之を第五十八圖に示す風靡
 體挿法の型に據つて例を述べるならば眞位にはスヘキ二三本

行位にはハギを入れ草位にはキ、ヤウを入れる。次にヲミナヘシをス、キの前添へには高く、向添へには低く、又フジハカマミヲミナヘシの小さいものと取交せて「懷」より順次に低く挿し、クスは草位の「控」か又は淡白ス、キに纏ひ附ける尙低い所にはナデシコを配合するのがよからう。之は右七種の普通生育状態を斟酌して述べたことであるが、斯様な主題の草花を花戸で求めたものは培養のものが多しから自然風致に乏しい、依つて成るべく原野自生の未生、又は小振りのものを少い目に使つて活ければ折角の盛花も一向に見映のせぬものである。器は先づ二三尺のものでないと不釣合である。

◎ハゲイトウ、ヒルガホ、井ノコロケサ、ツユクサ

一ハゲイトウを以て眞位行位を入れ、ヒルガホを枯れ枝に纏ひ

附けて草位を入れる次に眞位と行位との中間「懷」より草位のヒルガホとの間に疎に井ノコロケサの紅葉したものを二、三本と又た、「谷」の處へはツユクサを入れ後園の様を現すものもよい。之は風靡體挿法の第五例に依つて活ける。器は一尺以上のものでよからう。

◎ダリア、白ウメモドキ

一第二十二圖手型第十一挿法第一例に依りウメモドキを以て「眞」行位を作り其他は惣てダリアとの二種活けである其中圖の如く花の下垂れたるものは眞位の「添へ」、「懷」又は草位の「眞」に使ふのがよからう。

◎サンシユウの實もの、イヌガンソク、バラ

一手型第一挿法又は風靡挿法體第五例の型に倣ひサンシユウの

實もので「眞」行「草」の三才を作り、ヤマソデツ(イヌガンソク)の三本か五本を以てサンシユウの前添へ「懷」草位の「控」等に入れ、薄桃色か又は薄黄色を帯びたバラを二三輪「懷」と草位とにあしらふがよからう。尙イヌガンソクの挿し方は眞直に流儀花のバランの如くに扱ふのがよい。器は第六十八圖に使ふてあるやうな脚の高いものがよからう。

◎丈長きアスパラガスとアフヒ又はマガリツト、ポタン其他淡白な草花と取合せたもの

◎ツルモドキとコハマキクの類を取合せたもの
 一右ニダ組の花は何れも第四十八及び第四十九圖の挿法に基き掛け花釣り花其他丈高き器に活けるのである。此挿法も草花の取合せ及び容量を見計ふ事が肝心であるが蔓尖きの方向に

注意し本勝手非勝手の區別をよく見分ねばならぬ。

◎ユキヤナギの紅葉と帯紅紫色重辨のキク

一手型第十一挿法によりユキヤナギの枝葉繁つたものにて眞位を作りキクを行位草位「谷」の凡てと尙「懷」に見え隠れに入れるのがよい。(第二十四圖参照)

◎サへユリ又はタメトモユリ

一兩種の内何れにても餘り澤山に花の附かぬものを選び手型第二、第十一、第十七及び第二十三挿法に依るのがよからう。あしらいさしてコンギク(方言ミヤコワスレ)のやうなものを規律正しくせず、瀟洒に入れるのがよい。器は其挿畫に用ゐるやうなものを参考とせられたい。

◎アカシア、ホトヘギスサウ、ゲルベラージ

一明月についての意匠活け、又は自然挿法については先輩諸氏の色々な挿法もあるから。此處にアカシアを主として風靡體挿法第五例に據つて「眞」行「草」の三才を作りホト、ギスサウを中腹にあしらひ桃色ゲルベラージ二三本草位の「控」に入れる。之は優婉なる色彩である。器物は淺手の滋味のあるものがよい。

◎ピナンカツラ、サヘリンダウ

一手型第二十挿法に據りピナンカツラを以て眞位を低く、行位は垂れたやうに流して入れ、草位にはサヘリンダウがよからう、器は陶磁器又は銅器共に薄型のもものがよい。

◎カキツバタ(花實あるもの)

一此の時季のカキツバタは實が出来てゐて、青葉の中に枯葉、

虫喰葉も交つてゐる。又た名残の花もある。之れは船形の花器を用ゐる。洒脱に活けるのがよい。活け方が本勝手なれば花器の軸を向つて左にして、左寄りに手型第三挿法により花は全體に於て一本を眞位に副葉二枚の中一枚は虫喰葉を使ひ其れを眞位の位へ流しとし其の他の葉組は(二二四頁)カキツバタの條に述べた如く枯葉を草位の圍ひに一二枚、又草位の「控」の葉組二枚のときには一枚の高い葉は圖に示す如き虫の巢ごもりしてゐる、くせ葉を使ふのも風情のある活方で、片方の鱸にはミツヒキサウ、ツユグサ或は池畔自生の雜草にても淡白と手型第十七挿法によつて入れるのがよい。又實を眞位の花に替へ行位に花を使ふのもよからう。

◎ダリア、アスパラガス

一ダリアを此のころに使ふことは少し時候遅れの様であるが、花の性質上此頃のものには莖も髓に活け具合もよく、又水も揚げよいのである。先づダリアを主として五輪か七輪かで一尺位の白磁に少し小型の氣味に之を手型第一挿法を適用して活け、其の眞位の花の上部二三寸、行位の花には一二寸に、アスパラカスを一本づつを相對の方向（丁度流儀花のバランを活る如く）に被せ又草位流しにアスパラカスを使ひその小形のものダリアの中間にあしらひ、草位の控にダリアの蕾を入れる。此の花型は色彩を主としたもの故餘程ダリアの花色の調和を考へ、餘り不調和のときは草位、又は草位の控に他種の小花のものを活けても差支はない。

ハマナス、アスタ、又は單瓣コギク

一其姿の雅趣あるハマナスの如きものは手型第一挿法第三例同第五挿法第二例同七及び第十挿法の何れかを適用し其内前の二法によつて活けるとときには草位又は「控」に濃き紫色のアスタを使ひ又後の二法によるときは小花の黄又は白色のキクの類を草位及び「懷」に見え隠れに入れる（第三圖参照）

◎チヤの古木サへリンダウ、ヤブカウジ、シュンラン、ヒカゲカツラ、

一チヤの古木を喬木に見做し第六十四圖意匠挿法第一例に據つて器の片寄りに活け根元にサへリンダウ又はヤブカウジ、カシキク、マガリツトの類を寂しくあしらい反對の方にはシュンランを手型第十七挿法によつて活け根方には殆んど全面に涉てヒカゲカツラを布きつめるのである器は小判型其他淺いも

ものがよい。

◎カキの紅葉ハマギク又はアスタ

一カキの紅葉を盛花に活けるときは餘程枝振を撰擇せぬと器物との調和を欠き失敗に終るここが出来る挿法は手型第一、第十一又は第十七を應用し「懷」及び草位の「控」にはハマギク又はアスタがよろしからう器は白色のものは調和が悪い、然し之れは鐵鉢型の花器を基としての挿法であるが總てカキの木には下垂れの枝振で面白き曲のあるものが多いから手型第二十挿法により高卓の上に瓶花として活けるのがよからう、著者が或る席上で時雨の題により黄紅班の枝垂れ大葉のカキを手型第十一挿法に基き釣り花活けの左右に其眞位のもの間は中以上をも垂し之にツタを絡ませ床上には木地なりの洗い晒

れた敷板を置きそして枯松葉其他雜木の紅葉五六片を活けたカキの木に振り掛け又敷板にも散らして此カキと敷板とに吹き水をしたさき一寸興味のある意匠と思はれた。

◎カンギク(紅葉したるもの)サヘリランダウ

一カンギクを地味な色合の陶磁器又は青銅長方形薄手の水盤に大きく水面は三分くらいを見せ、手型第一挿法に據つて全體を活け終り、草位の「控」として成るべく全體の花の後よりサヘリランダウをあしらう、又此時分のカンギクは未だ蕾の笑はぬ時であるから小型のハマギクの開花三五輪又は他の草花でもキクに類似したるものを其の異種の葉の目立たぬ様にカンギクの花に見紛へる位にあしらふのがよい。又風靡體挿法に相應しい枝振のさきにも「控」は成るべく後手より入れると奥

深く見える。

◎キク(花銘明月花白色、花銘巴花黄紅色)(直莖一輪附

花壇もの)

一キクは餘程活け難く又活け易き物即ち語を換へて云ふと色彩は兎も角、其の生育状態に依る活け方を見定めることが第一である。故に挿法に就き箇々に説明することは困難である。此ころは卷頭章選花の部に示してあるが讀者の繁雜を考へ特に此菊花の選擇に就て述べよう全體に此花は花壇培養のものよりも却つて素人造りの野生の如きものがよい又假令花戸で求めんにしても風情のある枝振のものを擇ぶのがよい惣體キクの莖は折れ易いもので假令技巧を以て折れない程度で屈曲を附けても盛花の本旨たる其花卉の生氣を殺ぐの嫌ひがある

依て花卉出生の姿に隨ひ左に掲げた挿法を選ぶのがよい。

一開花季節の魁として京阪地方にては花銘を明月と稱へ花の純

白のもの又は殿として銘を巴と云ふて帶紅黄色の花で其花が

莖頭より順次に二三輪附きのものがある、是等は矢張り直莖

の部に屬するものであるが其花の附按排に依つて莖全體に幾

分曲折のあるものは其姿勢に應じて第二圖手型第一挿法第二

例に依つて活けるか、又は第六十二圖の風靡體挿法第五例に

依つて活けるのがよからう。

一花壇培養種で其花が莖頭に傘狀に附たものは餘儀なく其自然

風姿を没却して藝術及び色彩の美を發揮すべく第二十六圖手

型第十二挿法に依つて是を活けるのである。此挿法は俗に皿

活けと名附けて他の手型第十二挿法と一見異様の觀があるが

然し根元の挿し方及び配置方向より是れを云ふと右の挿法に準據した活け方である、其内にも一般挿法の「懷」の花は眞、行位のものより低く、又落ち込み即ち「谷」の箇所へは惣て木ものなれば若葉、花ものなれば是非蕾のものを挿すのが定法である、此挿法は其鳥瞰圖に依て示す如く眞、行草位の花を可成低く斜に活け又「懷」の花に依つて天性の美を保つが爲に惣ての他の挿法のよりは反對に丈高く挿したものである、此「谷」の花は眞、行、草三才の花色が濃厚なるさきには花はなるべく満開のものにて白色又は他の淡白した色合のものを使ひ葉の下蔭に奥深く光を放つが如くに極めて低く活け總ての色彩の調和を計つたものである。又挿畫に依るご幾分丈長き眞位の花が行位の花よりは低く見ゆるが之れは挿花を斜に見

下した姿である依て行位のものは眞位のものより丈は短く又た花の高さも隨て眞位のものより幾分か低いのが至當である尙ほ本挿法の主眼とするところは凡ての花を「懷」のものを起点として周圍に放射線狀に挿すのであるか其内草位の前添へ及び後添へは「谷」の花を起點せねばならぬ依て(九二頁)第二、第三圖をよく會得して此法則を守り挿畫以上の花數を挿すにしても整然とした花型が出来ることが若し一本にても間違つた挿し方をするると全部が雜然とした花型に終ることを忘れぬやうにせねばならぬ、亦草位の花は挿畫によるご開花を用ゐてあるが之れは從令蕾にても力(大輪のもの)さへあれば差支へはない。

◎キク(野生の莖に曲あるもの)

一第四十六圖は素人造りの庭園のキクの活け方を示したもので、控さして小花のものを同じ挿法に依り小型にあしらうたものである。

◎キク (雑種)

一第三十七圖は前條三種挿法を取捨混合して一箇の花型を造り、花園其儘を摸寫した活方である、依て挿し方は直莖のものは後方に曲のあるものは順次前方に挿し特に「懷」「谷」等の凹處の區別を目立たぬように活けるのがよからう、尙は畫面では「行」「草」の文字が轉換してゐるように思われるが、此文字は挿法の標準としたものであるから枝振りの都合によつて何れかの一方を高く活けたなればよいのである。

◎大輪キク又はシヤクヤクの平籠活け

一大輪キク又はシヤクヤクを以て大型平籠類に活けるとときには、手型第十四挿法により眞位のもの器の中央少し片凭りにその莖の後方へ反り氣味のある勢いよきものを撰み流儀花のバランの眞位のもの、やうに斜に行位のものに相對して入れる、依て行位は上向きに反つた莖のもので其眞位を受けそして草位のもものは莖の中央以上が水平に近く又たその花は少し手前に向くものは莖の中央以上が水平に近く又たその花は少し手前か又は適宜の挿法を以て賑はしく活けるのがよからう。尙ほ巻頭例畫の内その眞位のもものは一見附手の後ろ側より挿したやうに見えるが之れは其畫の不注意である、依て此の眞位は是非共に附手の前側に挿さねばならぬ。

◎マツ、白キク

一挿畫第十七圖に示す如く其幹が二タ極で、そして手前の枝の
 低きマツを以て眞位行位を型り白キク五六本を以て草位を作
 るのである。器は圓型一尺二寸ぐらゐのものを標準にした。
 然し此マツは特に二タ極でなくとも同じ種類であれば二本で
 格好よく組合してもよい。

◎サバンクワ、キク

一若木サバンクワの通有性として其枝の上面が俗に掬ひ形（匙
 状）のものが多い之の開花時期には盛花さして他の花ものに
 乏しいときである。依つて此枝の振りを其儘に第六十三圖の
 風靡體挿法第六例に當て嵌めて活けるのである。そして草位
 の控さ「向ふ添」を兼ねて紫色が、つたキクを以つて本法の全
 型と同じ小型のものを入れる。依つて此活け上た花を手前よ

り見ると其眞位の枝に咲いた花は擴げた唐傘を横に翳した如
 く行位のもの斜に又草位のもの普通の姿即ち上向きに咲
 いた形である。此挿し方は「眞」さ行位この枝は出生其儘の姿
 で入れ尙草位ものは幹に附た枝に幾分の技巧を加へ普通流
 儀花の「草位流し」の活け方に依つて挿したものである。器は
 少し深手のものか又は圓形高脚のものがよからう。

◎ムメモドキ、コハマギク

一赤ムメモドキを以て手型第九挿法により眞行位を作り、あし
 らひのコハマギクは手型第十挿法に依り其眞位の花をムメモ
 ドキの「懐」に丈け低く入れ、又行位ものはムメモドキの行
 位の「前添へ」に尙草位の花は全型の草位の位置に挿すのであ
 る。又ムメモドキが手型第十一挿法に相當しいときにも畧

此活け方を應用して其根方の陽に見ゆるやうコハマギクを程よくあしらうのである。

◎サツキ(苔附)ミカンギク、ス井セン、シユンラン、ヤブカウシ、サヘリンドウの類

一冬期は一般の者が總て濃厚なる色彩のものを望むから自然花にも色彩のものを好むのは人情である。然し假令一二色のものがあるにしても草木調和上の色彩としての花に乏しい頃で花卉の選擇に注意せねばならぬ。ここは再度述べてあるが先づ苔附のサツキに就て一言する。其サツキの配合、即ち「眞」行位の中間「懷」又草位の「控」等にセイヒツバキ又は其他の艶麗なる色の花を見受ることがある。之は譬で云ふと鸚鵡の様な羽色の艶麗な鳥を日本趣味の幽邃の域に配した様なもので何

ごなく落附の悪いものである。由つて之には自然の風趣として不如婦の如き鳥を配せねばならぬ。これと同じ意味で此花の配合としても成るべく幽趣味のあるカンギク、ス井セン、シユンラン、ヤブカウシ又は名残りのサヘリンドウの類のものが最もよい。尙ほ洋花のマガリツトをあしらうのもよからう。自然本位の木ものに洋花で而も温室咲きのものをあしらふことは自然に矛盾する様であるが、是即ち不自然を藝術的に自然化したものである。又此サツキの枝振は千差萬様のものであつて此處に一定の挿法は云ひ難いが先づ木振を選び前掲挿法の何れかを應用して活けるか又自身勝手の挿法を混合する嫌ひがあつても却つて其が雅味ある活け方になることがある。然し是非共枝振の自然に反せぬ様に「眞」行「草」の三位

を具備して活けることを忘れてはならぬ。如斯至難の花卉を落附のある花型に活け納めることは各自鍊磨の功に俟たなければならぬ。器は一定して指示することは出来難いが總じて造味のある色合のものがよからう。

第十五章

◎配合の花等に就ての心得

一大凡盛花としては一花一葉にても容易に其天真の美を毀損することなく或る挿法により花器に納めるのが定法である然し眞位行位又は草位のもの、根方にある花は他のあしらいの花と混ぜせぬやう水面以上二三寸の間にある小花は是非取除かねばならぬ此事は凡ての挿法に通じての根方の注意である。

一ヒカゲカヅラの使ひ方には三種の區別あることを記憶してお

かねばならぬ(一)は普通圓形水盤又は平籠のるるに使ふ場合に單に其花止の目障りになるのを隠す目的ぐらゐに止まるもの(二)は自然本位の挿法として挿畫第四十二圖に示す如き其挿花の主たるものは勿論ナンテンであるが其挿法の主眼たる自然本位の要素としては此ヒカゲカヅラの配置法がそれの基因となるのである依つて此草のなるべく小極のものを撰み日表をよく見分けてヤブカウジの如き丈の低きものより一層低くカヅラを地上の苔と見做せるぐらゐに使ひ又た(二)は第五十四圖にある如く器より外に此草が蔓延して恰も早春の候に山上疎林の樹下灌木叢生の地上に朽ち葉の間より此草の新芽が抽出したその下た萌の様を摸し此草の自然美を表わしたものである。

◎ハナゴケ(石薬)

説 本種は京阪地方にては赤土質の山頂部に生じ其形状枝葉
明 繁茂せる灌木の密生して恰も海綿の如く其全體は灰白色
にして高さ一二寸のもの。

一此苔は自然本位に基き山野趣味の挿法に依り平水盤に木もの
を活けるさきにはヒカゲカツラと共に有用の小草と思われる
然し苔附サツキの如きもの、下草に使用するさきには其木の
苔と此の小草に使ふた苔とが同色であるから其挿花を見下だ
したさきに折角のサツキの苔を没却するやうな使ひ方をして
はならぬ依て其部分にはヒカゲカツラを混用してサツキの苔
を見映へあるやうにあしらうのがよい。

一八重咲きダリアの如きは性質の爲め自然に下垂状態のものが

多い。此等は兎に角も、他の一般に涉つた花は夜露を受ける
姿即ち蔓を水平に活けることが肝心である。然し此の花の如
く自然に下垂れの花は風情のあるものであるから眞位の「添」
か又は行草位の何れかの主なる花に使ふのがよい。

一ホウライチク(アスパラガス)を主として用ゐることは稀で、
大抵ダリアの如きもの、上に被せて活けることが多いが、只
無意味にダリアの上に覆ひ被せた様なのは心なき仕方である
由つて此ホウライチクの挿法にも花格を附け前掲挿法の頂に
ダリアに此草を配合した如くに活けるがよい。
一スゞキ、シマヲギ、ウ井キヤウの類を活けるさきは他の二種
はともあれスゞキの如きもの、莖を其長さの半分以下に切つ
て之を使ふのは誠に見苦るしいもので、丁度矢の如きもので

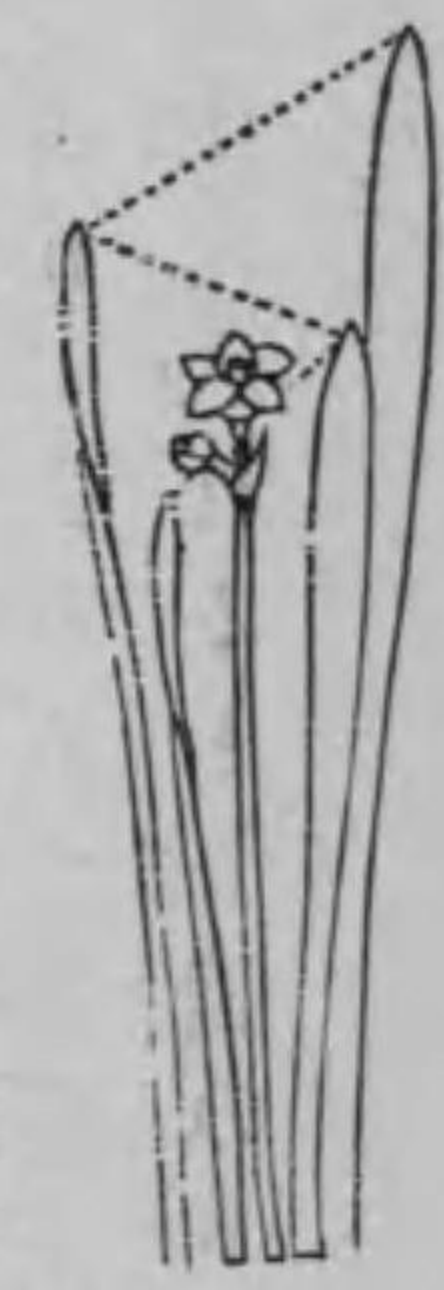
低く使ふごきには短い飾り矢のあるが如く尙且スゞキも未生のものを選んで活けねばならぬ。次にシマヲギのやうなものは餘り吾々の手で易く採ることは出来ぬが、假令花戸で求めるにしても、よく枝附きのものを選ぶのがよい。新芽斗りのものは幾ら新らしくても筍の丈を半分に分けて切つた様な形のもので、活けても風致に乏しい。

一 シュンラン又はランの一種キンリヤウヘンの如きものを活けるにも其の葉を半分以下に切つて使ふことは丁度スゞキの條に述べた如く誠に無細工のものである。由て各々が庭前にあるランの生育状態に注意し自然本位の挿法なれば勿論、假令色彩本位の挿法として使ふ場合にもラン其物が地味なものであるから餘り短く切り澤山に使ふことはよろしくない。又キン

リヤウヘンの使ひ方は殊更注意せねばならぬ。尙此シュンランを活けるときに其恰好の容易に附け難いものであるが先づシュンランのなるべく小葉の姿よきものを撰み大凡の形を見計らいそれを一抱に括り其上で恰好の悪い葉を切り取り實は上向に花は下向きにその眞位又は行位として挿し込むのがよい。

一 ス井セン、ノシランの様なもの活けるに當つて葉はランと同じ思ひに活けてよい。然しス井センは花舗のものなれば大抵一株毎に花のあるもので、本書中に説てあるス井センを中腹又は「控」に五本又は三本と表してあつても餘り花房の澤山にあるときには花数を少くして其組合せた五本又三本とても皆の數に各、花を差込まずして組合せ五本なれば花を三本、又

組合せ三本のときには花を二本、残りの葉を組んだものには花なしでよい。そして葉の艶の失せぬ様に氣を付け、葉のみを元の袴に納めて花のあるものより低く使ふのがよい。又ノシラン、シユンランの如きもの、葉を組合すにも一株毎に花を添へて活けるのは多過ぎて見苦しい。花は少いはうが雅致に見えるから、ラン三株なれば花一本、五株なれば其實一本と花二本くらいがよい。尙ス井センの葉の組方は挿畫に示す如く長短互に「くの目」に四枚を組合すのであるが最初スイセンの根方「ハカマ」の所を平手で机上にて柔らかに揉み先づ花莖を抜き次に内側又外側の葉を抜きて圖の如く四枚を組合し所用の寸法に剪り又豎に少し斜に剪り去つて「ハカマ」に納めそして花莖を適當の寸法にして挿すのである。



一自然本位の挿法の内に西洋花のマガリツトを使ふことがあるが、マガリツトの花は優美なもので日本趣味に適用することもある。其の葉の形状が無趣味のものであるから色彩本位の活方なれば兎も角、自然本位の活け方に使ふときには此花一種の使ひやうで全體の花を毀すところがあるから花の挿し方に高低を作り又よく其葉にも注意せねばならぬ。

一ドウダンツ、ジの紅葉は一本の木とすれば紅葉の程度に變化のあるものが少く、其葉の全體が同じ紅色になつて風趣に乏しい。先づ之を眞行、草の三才の内何れに使ふても草位の

「控」又は「懷」谷等にはマガリツト又はハマギクの如き白色の花を配合するのがよい。然し此ツ、ジの葉を適宜にすかして洒脱な流儀花に活け、銀屏風等の前に配するときは随分高尚なものである。

一カキツバタ又はシャウブの花を色彩として用ゐるときに餘り丈を短く切つて花首丈けのものを活けることは見苦しいものである。尙又葉の生氣を失はぬように注意せねばならぬ。

一ヤブカウジを使ふ時候は他の色花に乏しいときで、色彩本位なれば兎も角、自然本位の挿法の場合に他の色物の代りの意味で澤山に入れると其盛花が誠に下品に見ゆる。彩りこしても澤山に入れると全體の下部ばかりか赤く之も見苦しいものである。

一紅白二種の夕チバナも随分配合の仕悪いもので之をウメの大活けの「懷」又は草位の「控」等に使ふことがあるが、普通一尺ぐらゐの器に活ける眞位、又は草位の「控」等に使ふ場合には果實の付き方の割合に葉數の澤山あるもの故其葉を適宜にすかすのがよい。

一キクの如く莖の頂上に花の附いたものを一種活けにするときに只挿花の型ばかりを思うてゐると、其の花の美しいことのみが目立つて順々に階段の如く誠に風韻に乏しいものである。依つて假りに手前に挿した葉の爲に前きに挿した花を幾分見切る様なことが有つても、成るべく其葉を取らずに全體を活け終つた上で、隠れた花は見ゆるやうに出し、又有つても不恰好の葉は除いて、餘り葉の復雜せぬ様に花の後、前添へと

して大切に扱わねばならぬ。
 一 マツに就てはマツ挿法の項に細く説いてあるが、尙婆心を以て重複を厭はず述べて置きたいところは總じてマツ、ツバキ、カヘテなどの立姿のものは餘り恰好のよいものを選んで活けても技術としては一顧の價値もないものが出来て只鉢植の恰好よいものを瓶に遷したまでのことである。由つて自然本位の活け方のときにもよくマツを使ふが之も其マツが谿谷の自然挿法に適するか又原野の自然挿法に適するかの區別を最初によく考へて其風趣に應じて活けないと其本位を毀し畫餅に終ることがある。依て此類のもの、自然性を發揮するに第一に花器の調和。次にあしらいの適否に充分の注意をせねばならぬ。

一 カルカヤ、フウチサウの類又は秋郊野生の雜草にても細葉の紅葉したものを籠花等にあしらうのは目障りならず風情を添へるものである。世の進歩するに伴ひ温室培養法に改良を加へられ、冬期色々の花卉が咲く様になつたが、只だ珍花又は美花に憧れて花を徒に活けるときは、温、湿度の關係に因つて活け上げると直に萎縮して失敗することがあるから、此邊に能く注意せねばならぬ。

一 カイウ、コンギク、(ミヤコワスレ) スイレン (ニンフィア) センリヤウ等の葉は成るべく小さいのを選ばぬと活け難い。其内ミヤコワスレ、又スイレン、センリヤウの葉の大き過ぎるときには其の葉の輪廓に倣うて相應に小さく切るのがよい。
 一 コスモス (和名オホハルシヤギク) は優しい花で其の莖が亂雜

であるが、然し又其の亂雑の姿が趣のあるもので、餘り短く切り盛花に使ふよりは壺形の器に活ける方が風情がある。

一タメトモユリの如き割合に丈の高き出生のものを主として活けるときには、行位並に草位は普通でよいが、眞位に使ふも

ので其出生の風情を表すがために、普通より抽んで丈高く活けねばならぬ。

又花数の附き按排に注意せねば其蕾が「懐」の箇所等で澤山に開くと誠に見苦しい。

一又ナツテンの葉のみ附たものスイセンを活け水際に枝の短

いセイヒツバキの結構な花を入れ過ぎ、盛花の本旨を没却し

て、一見皿に肉を盛つた様なのは見得の良いものでない。

一色彩と云ふても餘り結構な花を澤山に入れることは美麗に過ぎ

ぎて、くごくしい。然し之は前に云うた如く一般家庭の床

に置く花に就てのことで、宴會場又は純洋式卓上の裝飾として數人環視の集點に置く様な挿花は一轉心氣を替へ成るべく奇麗に且華美に、只美を本位として適宜の挿法に據つて活けるのである。

一次に此事は水上法に就ての注意であるが草木の性質により根方を煮沸するときには藥品試験管に所用の液を入れ普通四匁掛けの蠟燭を以て之れを煮沸するときは充分沸騰して他の器よりも便利であり又其莖を深く液に浸すことが出来る。

第十六章 婚禮用としてマツの盛花挿法

一婚禮用としてマツの盛花を活けるときは餘り奇を好まず、ワカマツを手型第三挿法即ち立姿の不等邊三角型に據つて活け「草位」の枝元より以下、水面より二寸以上の所に紙を巻き

之に圖に示す梅結びに竹の五枚葉の二三箇をあしらうた水引にて括るのである。器は第六十三圖に使ふた様な脚の高いものに活ける。

又たワカマツの乏しいときには一本か二本の恰好よきマツで手型第一挿法に據つて活け、草位の「控」にシロツバキかキク又はカキツバタかを入れる。器は普通の丸型でよい。

第十七章

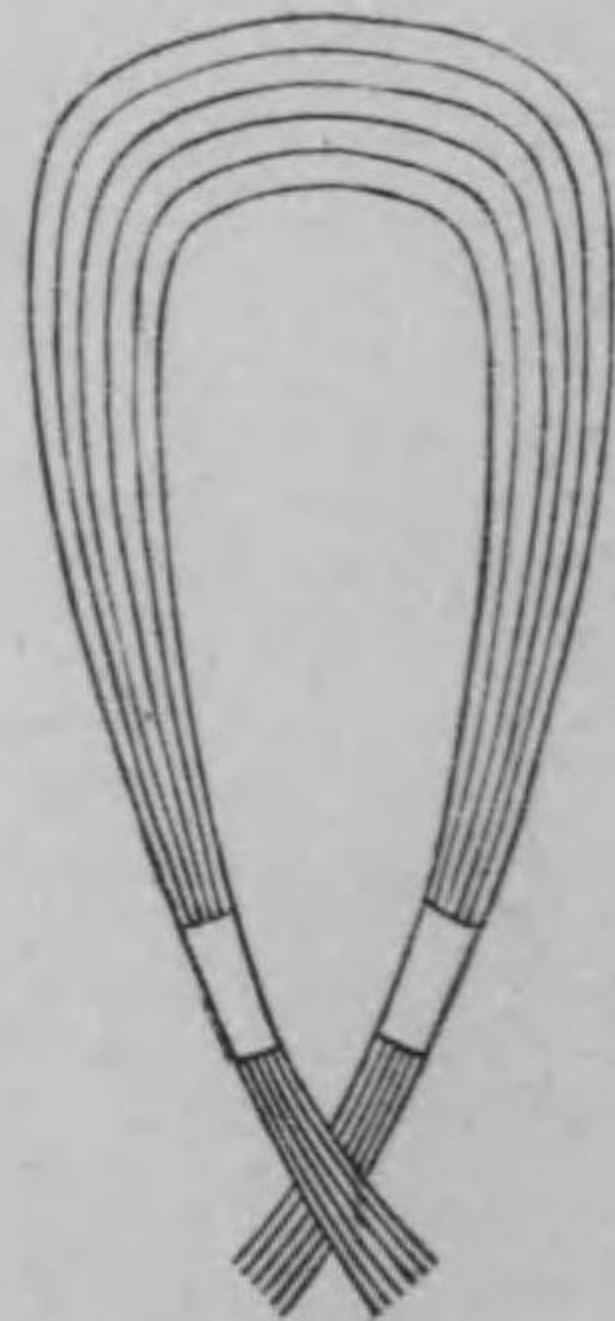
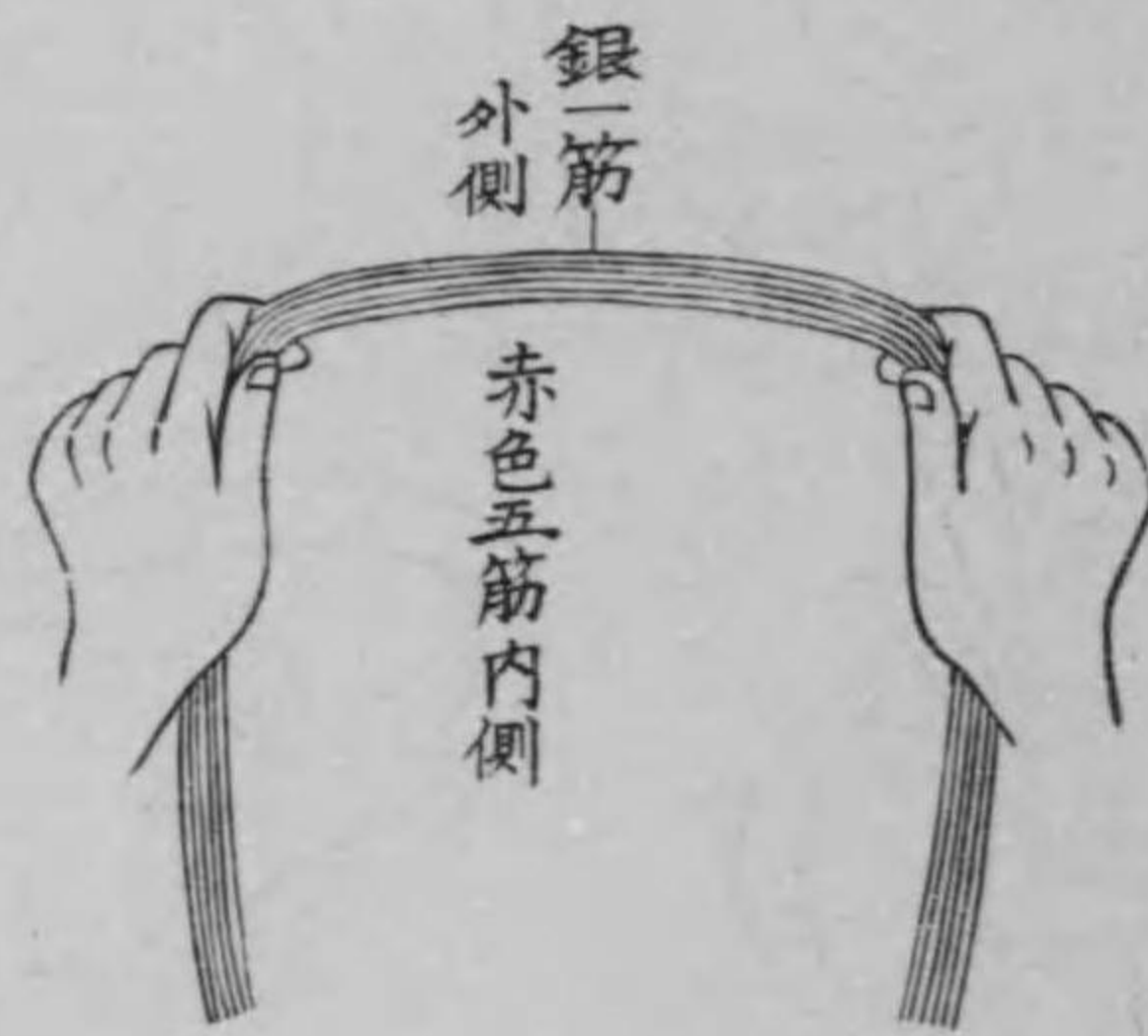
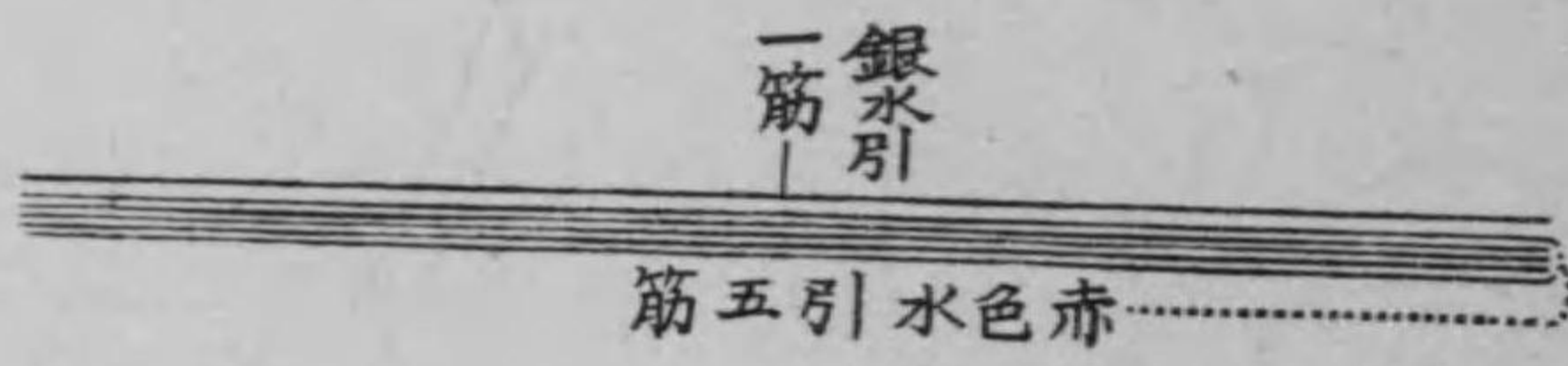
◎若松根用梅結び竹結びの仕方

一梅結の仕方は次の圖に示す如く嫁入のときには梅花の瓣は主に赤色水引を使ひ周圍に金水引一筋を添へ句「蕊」も金水引である又竹の葉は主に青色のものを使ひ周圍に銀水引を使ふのがよい尙婿入のときには梅の花瓣に白水引を使ひ周圍に銀水

引一筋を添へ香は尙且金水引がよろしからう偕て此梅結びの練習としては最初より水引を使ふことは至難の技である依て畫用紙一尺のものを三分ぐらゐの幅に切り挿畫の如く順次に組合すのである。亦此挿畫も著者が充分の注意を以て畫いたものであるが説明では了解の出來難いところもあらうと思はれる然し實地にしてみるに割合易い仕方である。

◎梅結び及び竹結びの圖解

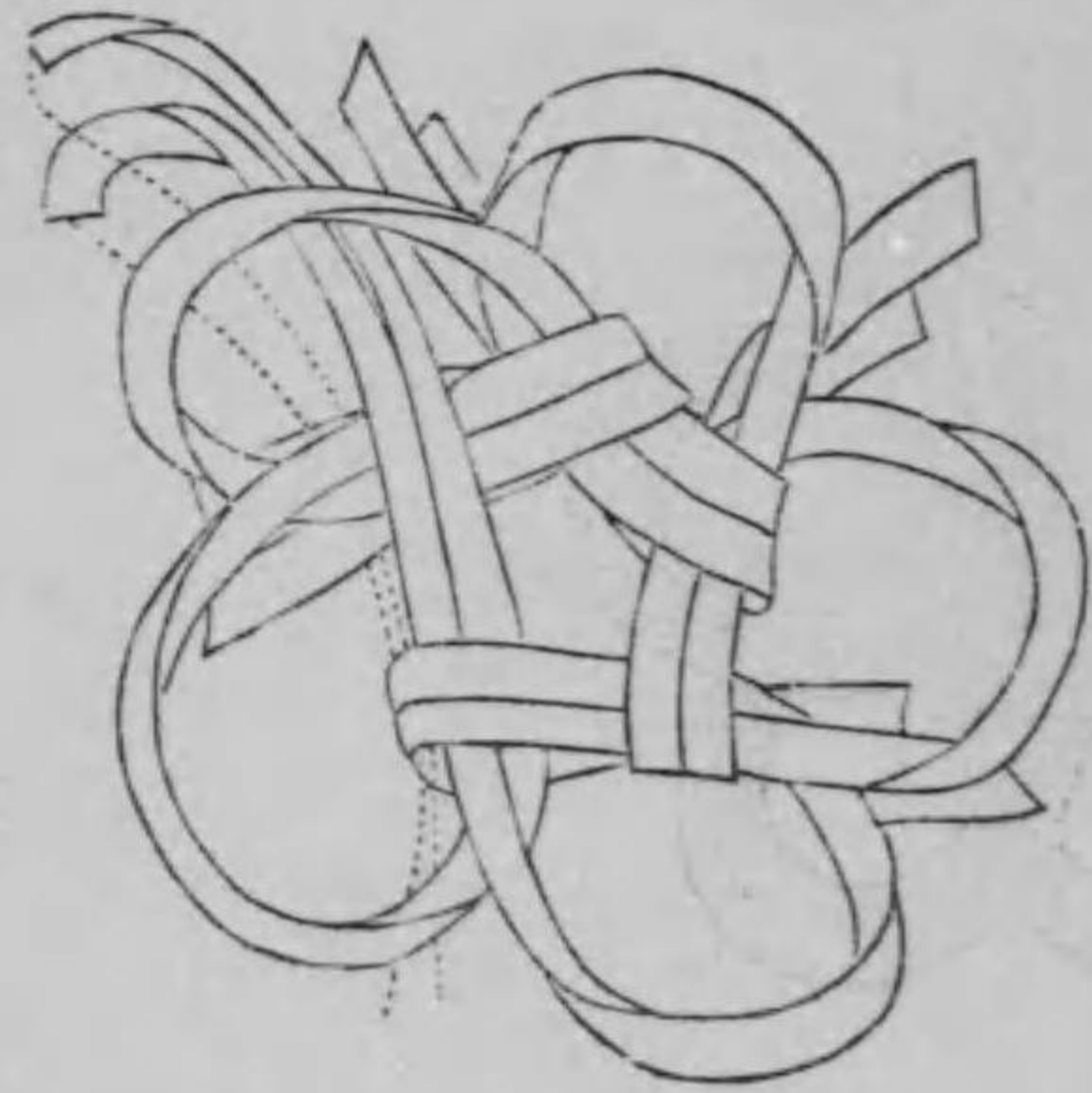
一梅結は最初銀水引一筋赤色水引五筋各二尺五寸のものを用意し銀水引は花瓣の外側になるやうにして此六筋の中央を幅一寸の銀紙にて平たく張り堅め其中央より二つに剪り左右の拇指と人指指にて折れぬやう靜に曲をつけ第三圖の如く灣曲を順次にして又片方を張り堅めるのであるそして赤色の水引の



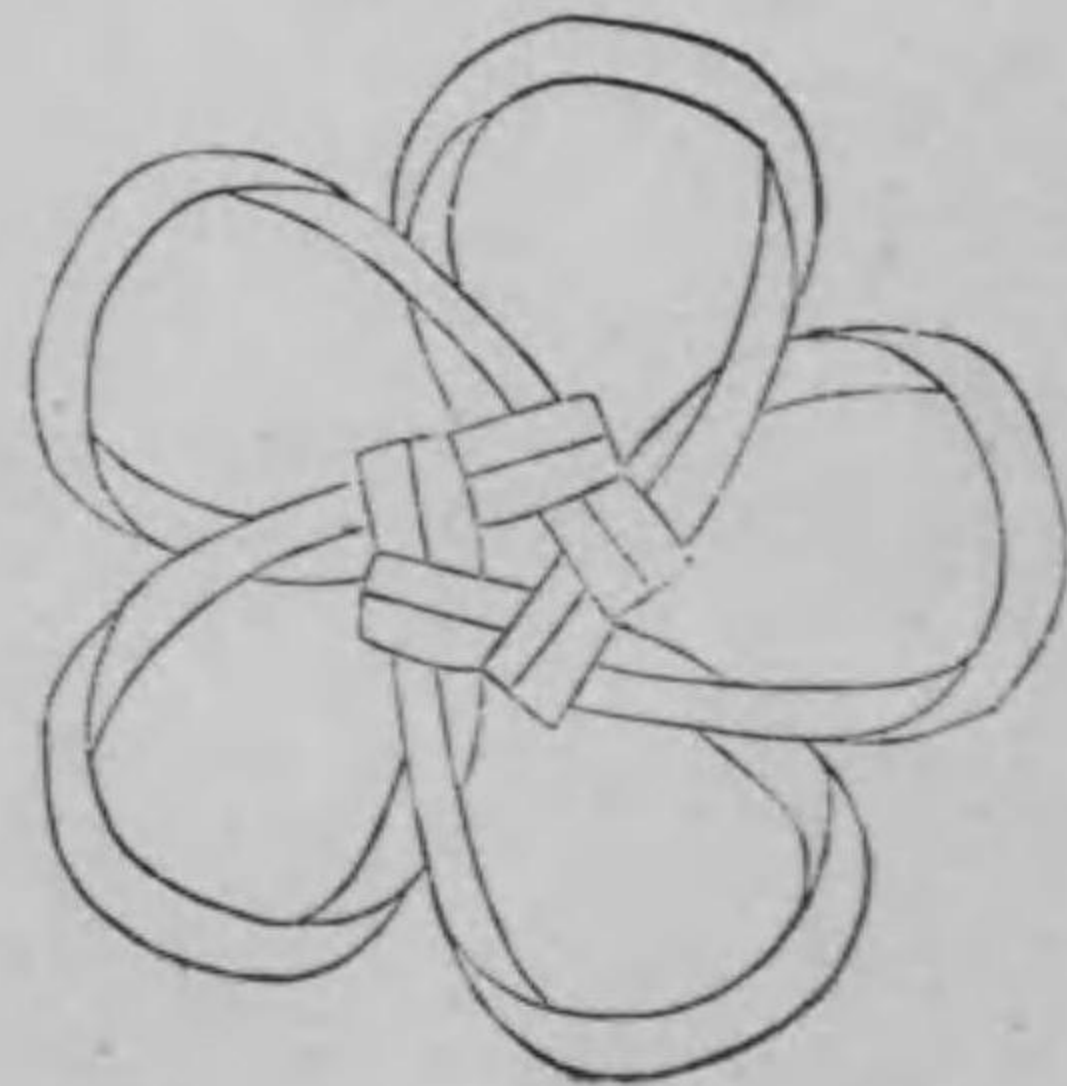
第十七章
中程を金水引十筋程にて束ね梅花の中心に差通し其水引を細
き火箸様のものに巻付け匂を作る、次に竹結は青水引の細手
のものが三筋と銀水引一筋を以て次の圖の如く結び合すのであ
るが最初に此水引の中程を(○點のあるところ)生した銅の糸
針金で括つて置くのがよろしい。



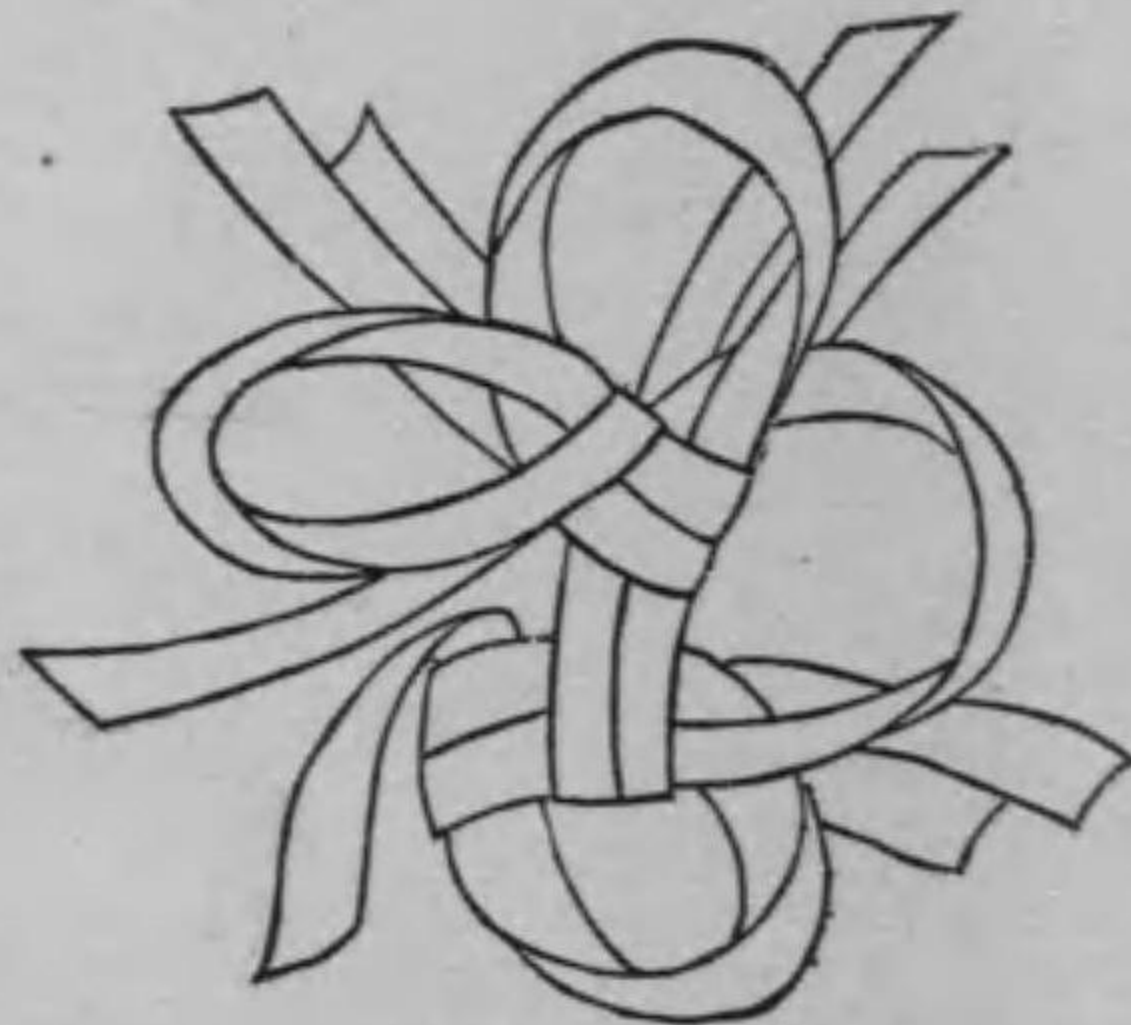
圖九第



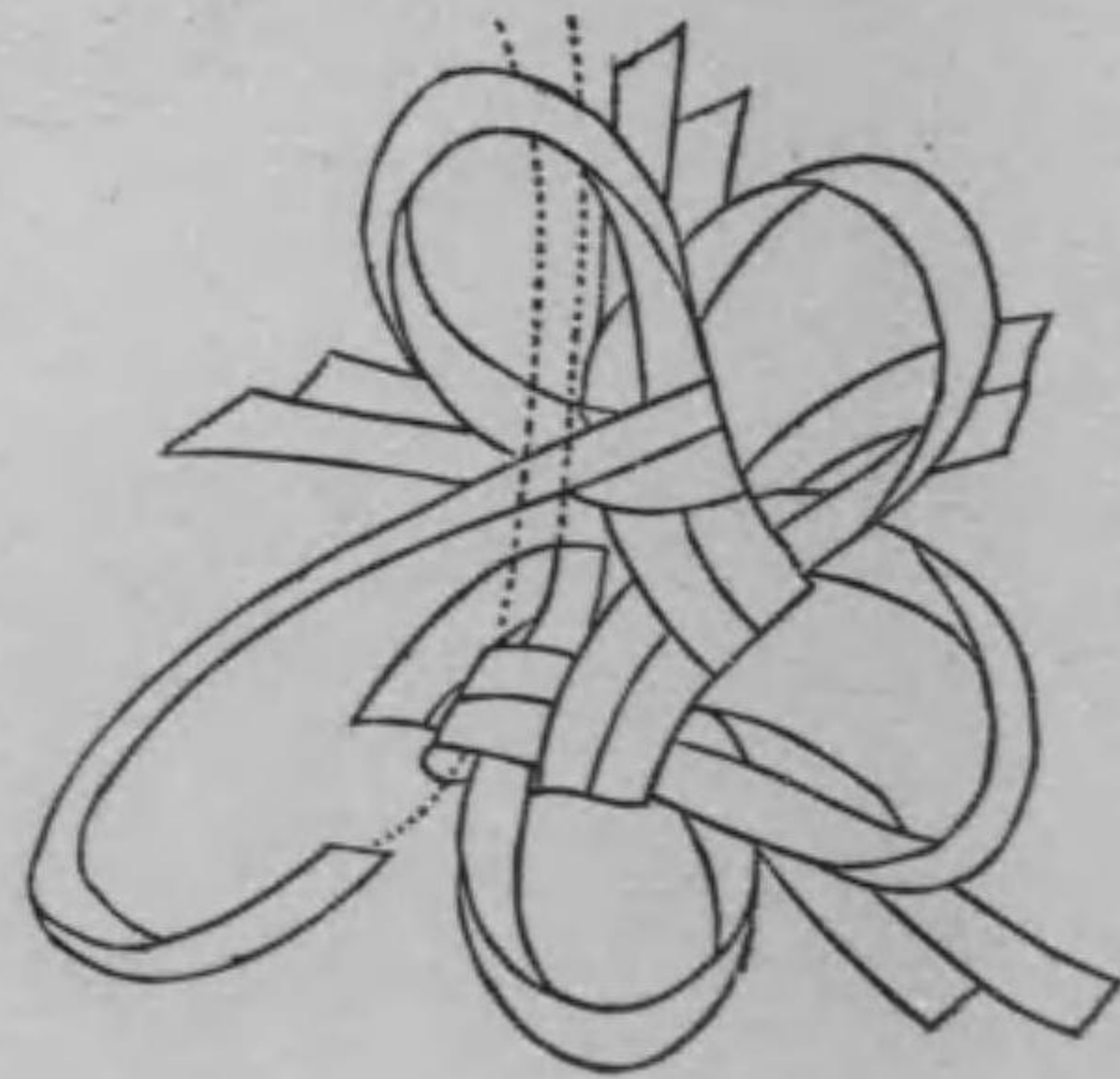
圖十第



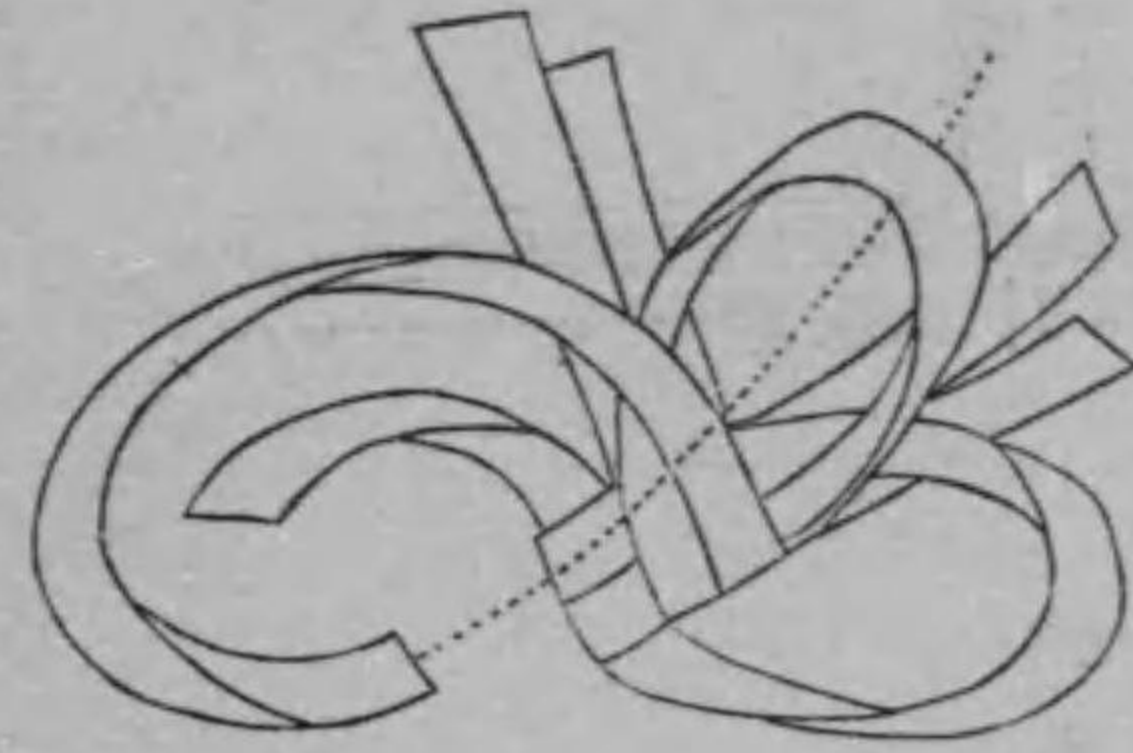
圖七第



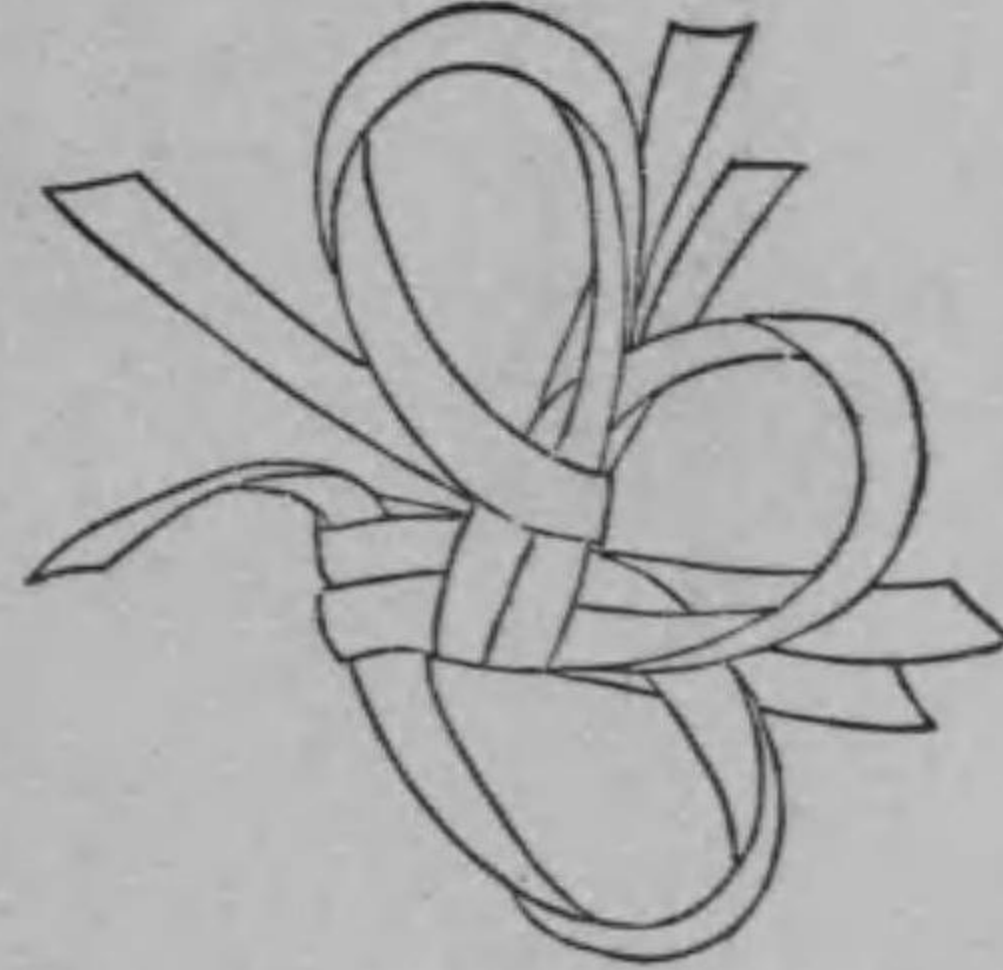
圖八第



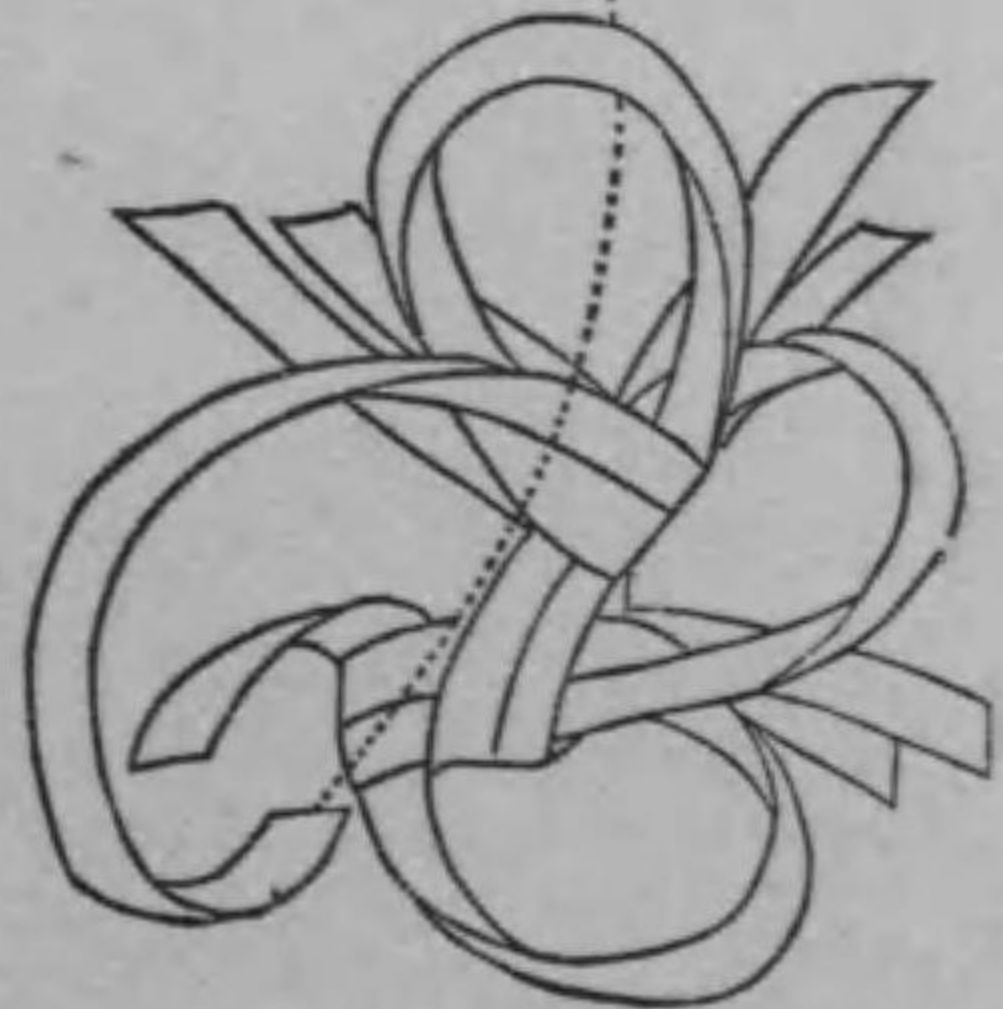
圖四第



圖五第



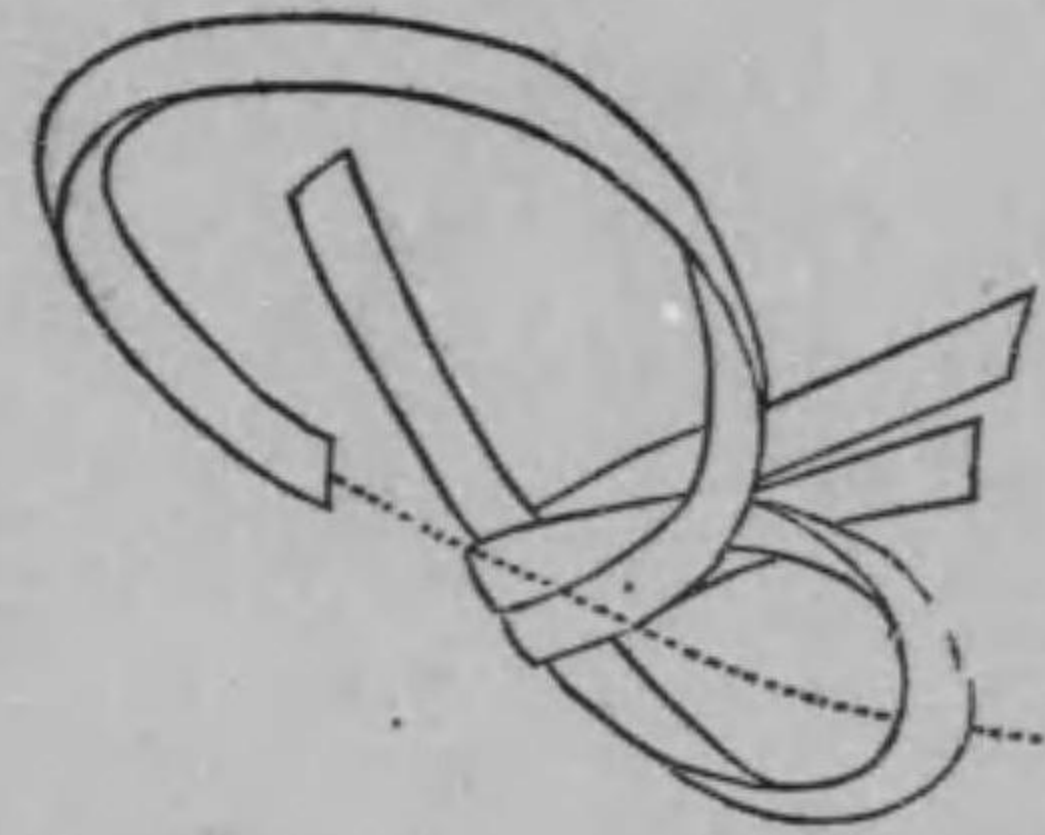
圖六第



圖一第

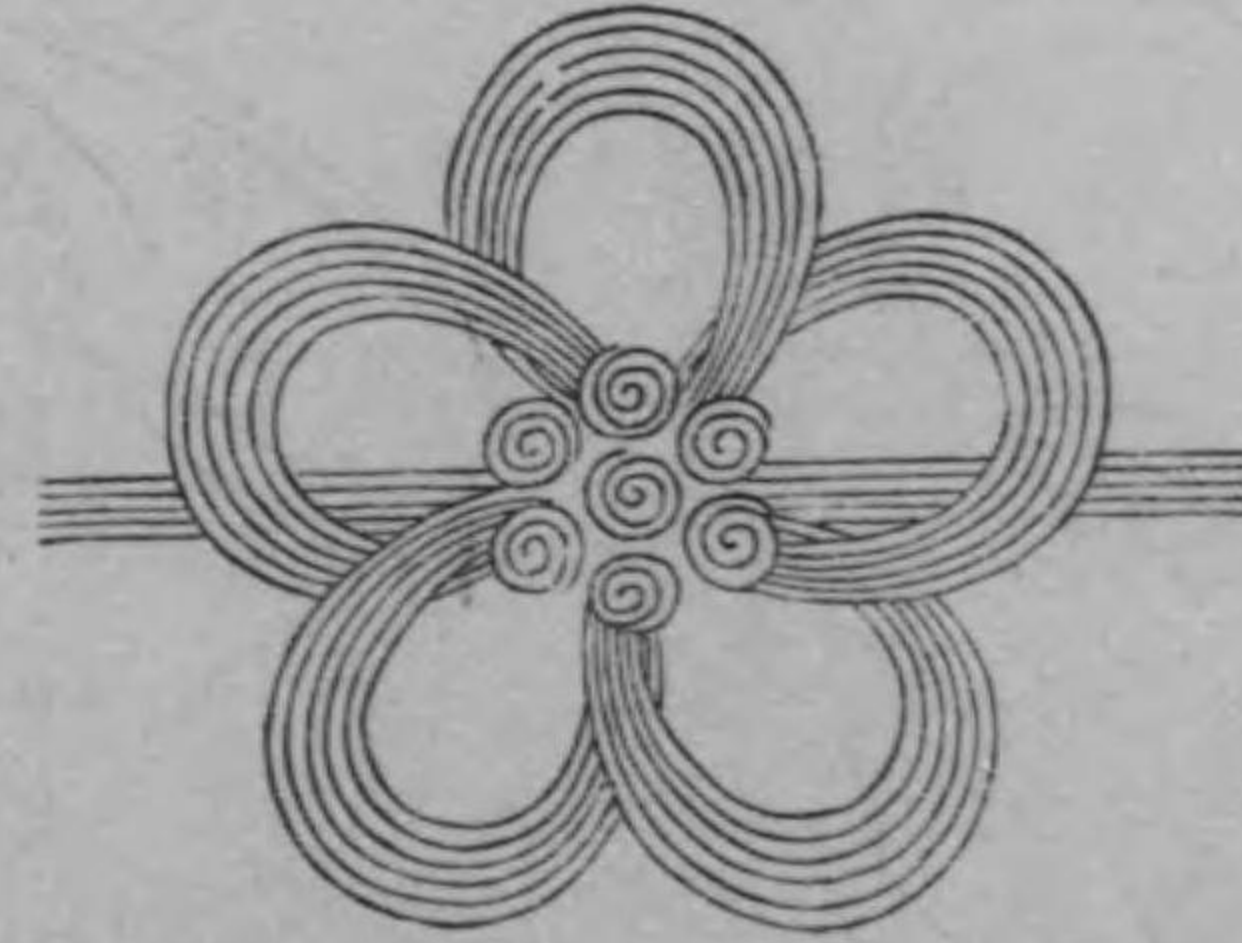
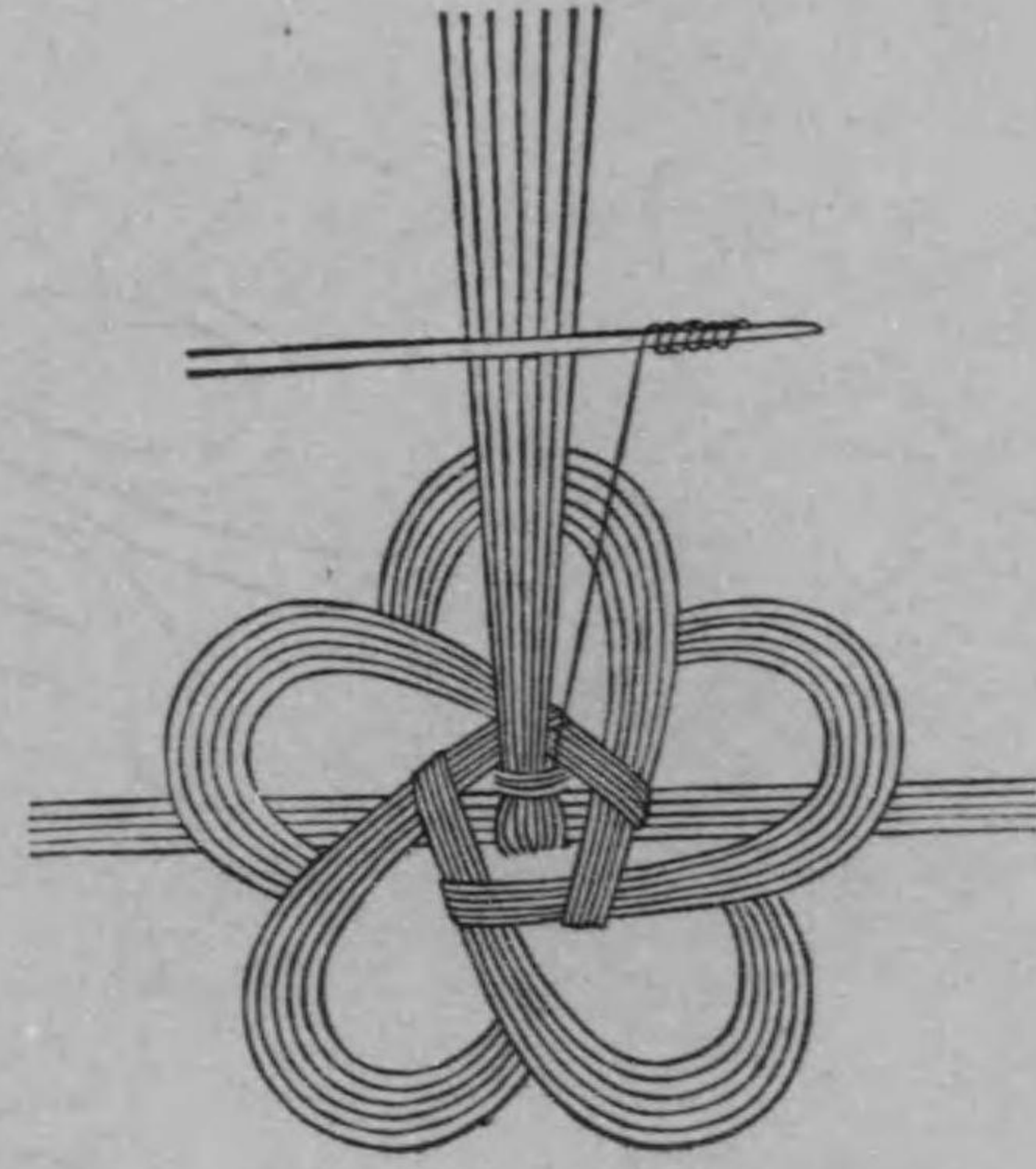
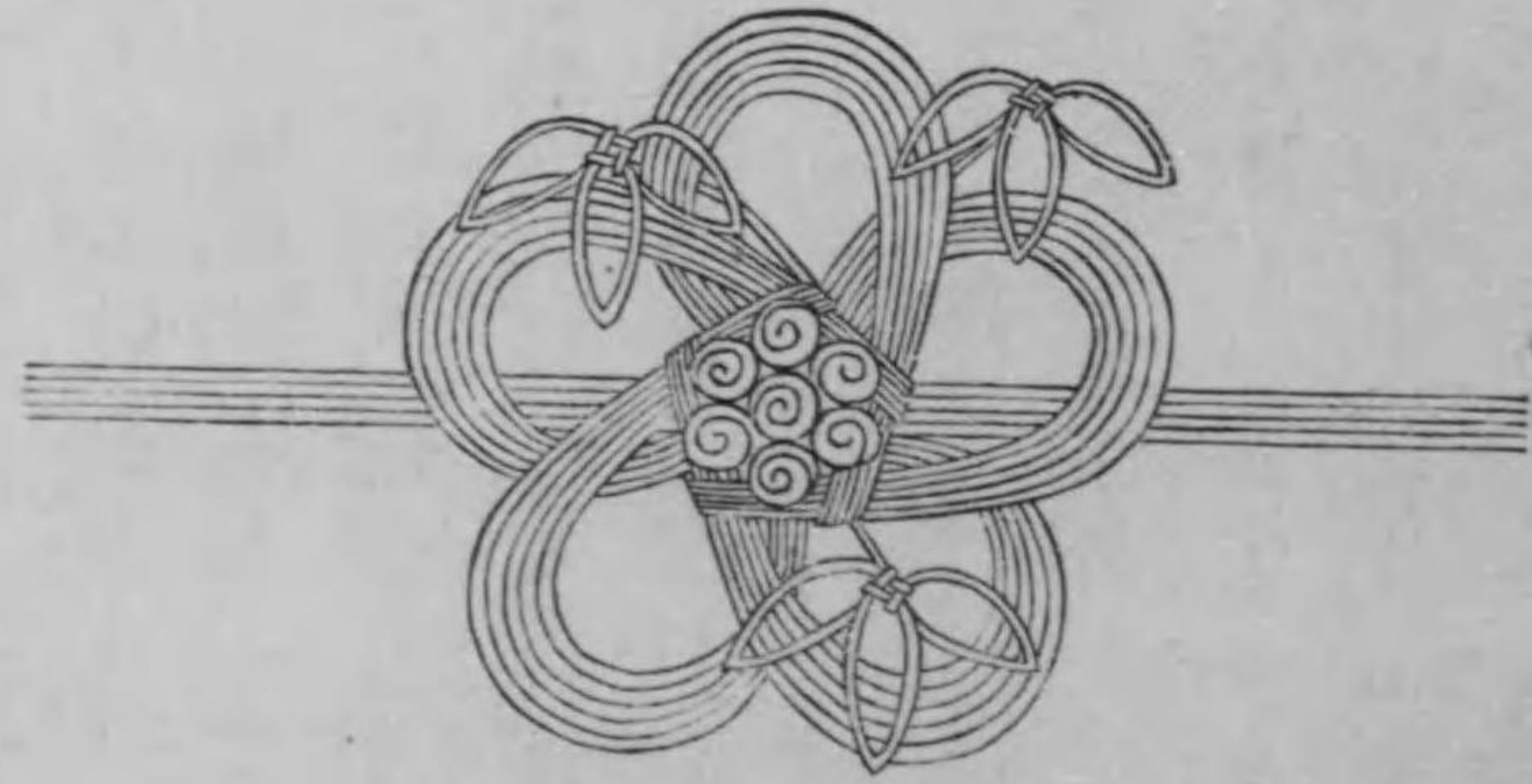
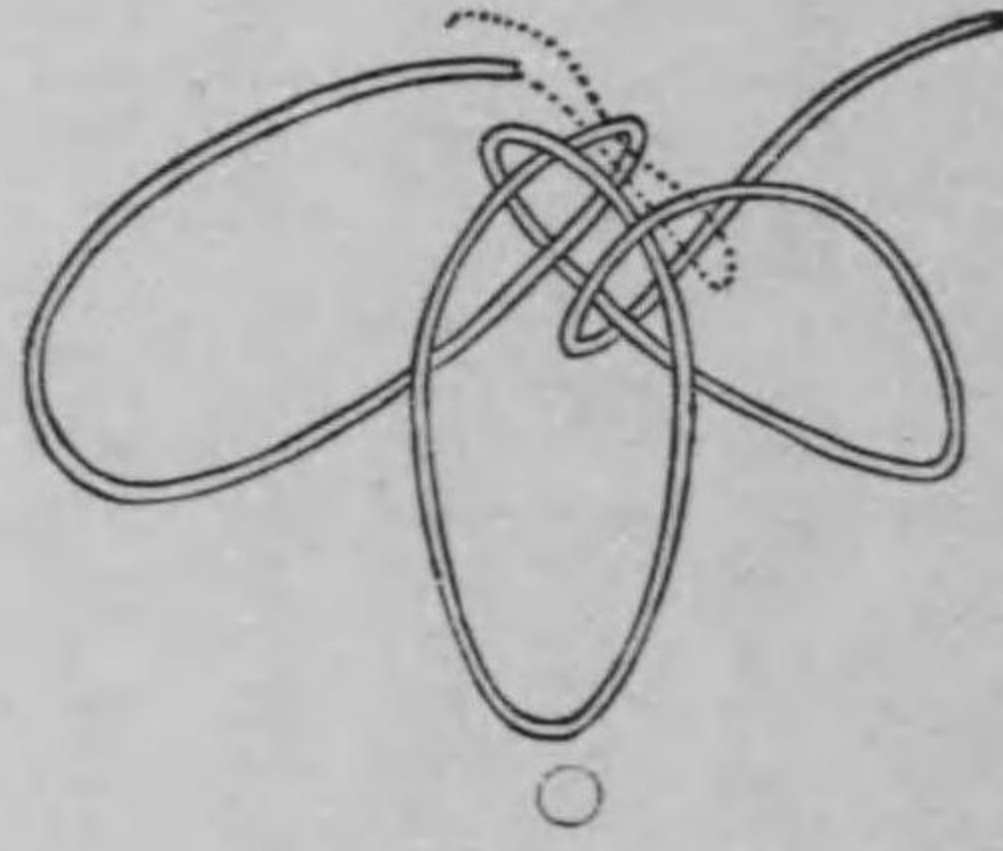


圖二第



圖三第





第十八章 草木の葉を大切にする事に就ての心得

一キク、ダリア、ツバキの如きものは葉の多い割合に、恰好の葉の少ないものである。其内キクの葉は殊更脆いもので氣を附けねば大切な一枚の葉が取れるが爲に折角の挿花の恰好を悪く見せることが往々ある。若し取り過ぎ又は、なきときには他の剪り捨てる莖の葉でも勢のよいものを選んで目立たぬ様恰好を補ふのがよい。

第十九章 挿花を据る位置に就ての心得

一盛花を活けるごき一般は臺上で活け、之を普通高さの床に据へるごきに、只だ花型の大小が床に相應しいか否やを見るまであるが、若し其儘床脇の一段高い書院又は違ひ棚の上に置くごきは丁度葉の裏を見る感じがするものである。其場合

は手型第十七挿法に據つて丈を低く活けるか又は器物及び花卉の恰好に依り器の片方に遍して手型第二十挿法に依て活けるのである。

第二十章 高卓、花臺及び敷板の扱ひ方心得

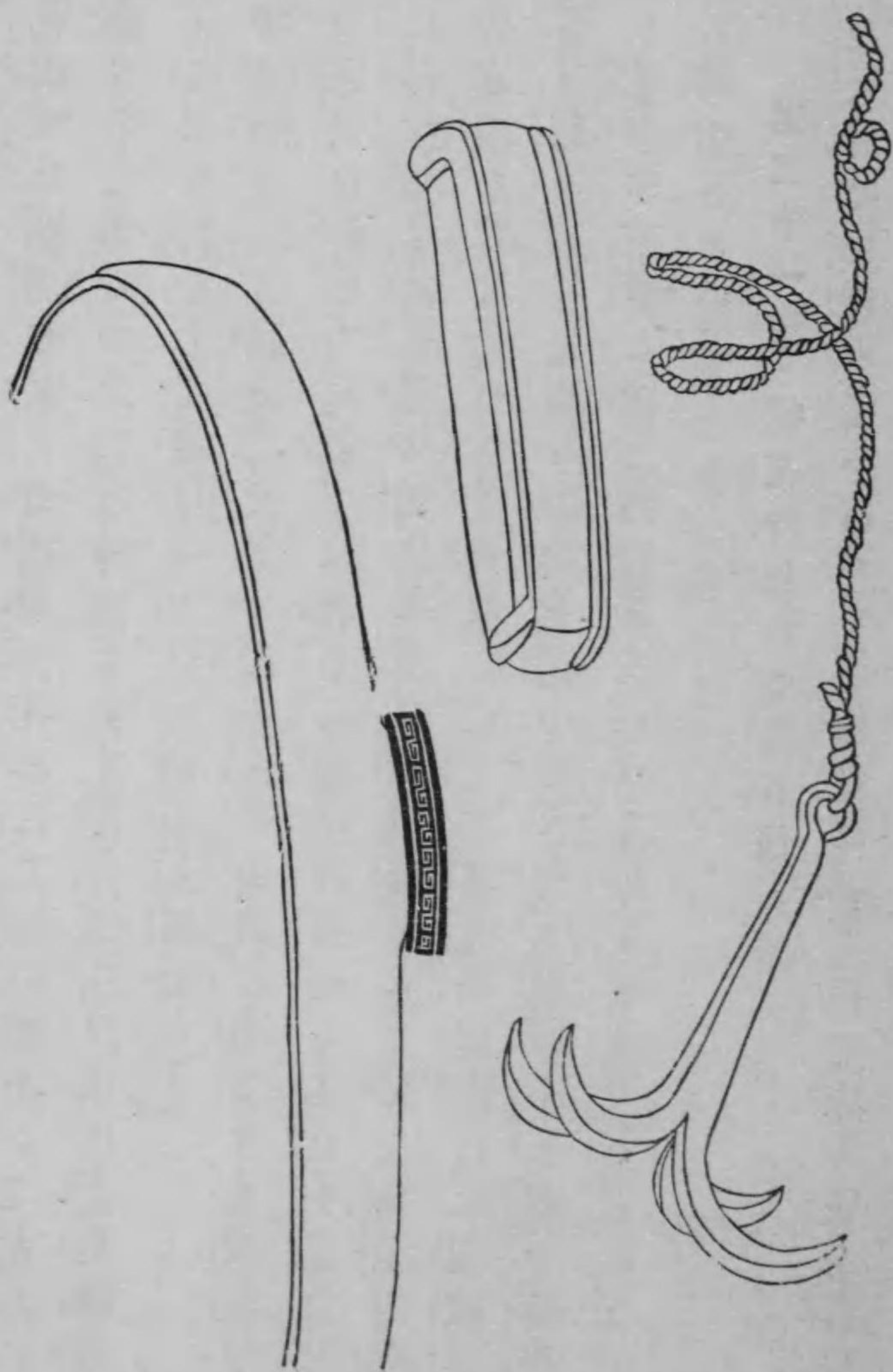
一器物に就ては挿花に依つて花器の一定せぬ如くに今何の花器は高卓、何の花器は花臺と云ふことは至難のことであるが、惣じて木物、草物に關はず三種五種七種と色彩に富んだ盛花で其花器が丸形であつて口經の廣いものを使ふ場合には花器の大小にも依るが一尺ぐらゐのものなれば普通先づ三寸ぐらゐの高さの花臺がよからう。然し小判形の様なものは之れより低い敷板がよい。

一自然本位の活け方に據つて銅器陶磁器又は籠類に活けた花は

成るべく敷板のるゐを使ふのがよい。然し之は床に据ゑるときのここで若し床脇の板間、又は違ひ棚、出書院等に置くときには敷板を使はぬ方がよい。

一高卓を使ふ場合の花器は大低、壺又は鐵鉢型である。然し此二種の花器を低く床に据ゑるときには其の花器の型が整然としたものなれば花臺を使ふのもよいが變型のものには尙且敷板がよろしからう。

一船形蛇籠形の如き花器は敷板か又は竹、萩の類で製へた筏形のものに限る。



一花書又は花席に於て竹根船形花器に二個の錨を以て左右に受臺ごしてあるが之れは挿畫の如く片方は銅又は唐金製鋼狀のものに意匠をして受ける方が如何かと思われる。

一挿畫第五十九圖の二尺五寸以上三尺の器に相當する敷板等の意匠及び拵へ方に就ては著者も種々の苦心をしたが是れは圖に示す如く其花器の周圍四所に海鼠形のもの又た角型四隅脚の水盤なれば之れを三角型△にして其直垂側面には雷紋等を浮き彫りにした個々の接ぎ足の如き唐木製の小さき臺を前後より花器の下敷に差し込むようにするのが輕便でそして又器との調和もよい。

第二十一章 插花拜見の心得其他

一友人又は相伴の宅へ行つて、座敷に通されて床の花を拜見す

るときは先づ花より三尺ぐらゐ手前に座し、一禮して拜見の上、元の座に就くのである。又花會等の場合には會主へ挨拶の上、先づ正面席の花を拜見し順次左か右かの花を拜見するのである。決して立つた儘で花を見廻し又は知人に耳語して插花の批評等をしてはならぬ。是は人に禮儀を欠くのみならず天與の賜物の花に對して誠に恥づべきことである。

一尙、花會の席に盆石又は盆畫の陳列が在る場合、花のみを拜見して之を見ないのは亭主の意を無視して居るやうに他から見える、されば禮儀としても一應は、それを拜見するのがよからう。そのごきに技術巧ながため近寄らねば纖細の手並が見兼ねる際ごても、接近し過ぎて圖を毀損させてはならぬ。

第二十二章

◎畫幅と挿花との調和に就て

一挿花趣味の向上するに就いて畫幅と挿花との研究は床飾法の主たるものであるが床飾りの法則としては其神聖なる飾附の趣味は凡てのものに分布的にあらねばならぬ依て古松鬱蒼たる樹下に幾千代かけて尉と姥との偕老の有合せの畫幅に對し一般に若松を活け此若松と尉と姥とを以て床飾の主眼とするが如く餘り極端なる挿花趣味先入の意志に捉らはれ其畫の古松を云々するやうなことはよくないことである、又稀には其畫の筆者を誨辱したやうな取合せを見ることがあるそれは畫法として餘り見受けざる特に鶯一羽を書き挿花に梅を活け又は小犬を畫きて竹を活け之に一笑の題を附するか如き是等は兒戯に等しきここで自身獨樂のものなれば兎に角來客等の

床飾りの場合には餘程の注意をせねばならぬ。
 一會て著者が淡彩遠景蓬萊山の畫幅に對し挿畫第五十五圖に使ふたやうな枝振りのアカマツを活けタマツバキをあしらうたことがある是等の活け方は其畫のマツと重複の思ひがあるがそれは却て遠近パノラマ式の裝飾法によりその活けたマツが一層の見榮のある思ひがしたことがある之れは參考として述べておく。

第二十三章

◎例題草木種別いろは順表

- 一イトヒバ、スカシユリ 一九八頁
- 一イトヒバ、アシ、ナデシコ、カハホネ、ヒシ、萍 二三三頁
- 一イトヒバ、キスゲ、アスタ 二四二頁

- 一ハイビヤクシン 一八五頁
- 一バラ、シユンラン、マガリツト 一九四頁
- 一ハナシヤウブ、マガリツト、紅白アネモネ 二〇三頁
- 一バラ、キスゲ 二〇九頁
- 一ハギ、キ、ヤウ、チミナヘシ、カルカヤ、シダ 二三五頁
- 一ハギ、ヒカゲカヅラ 二四三頁
- 一ハケイトウ、シチン、又はアスタ 二五〇頁
- 一ハケイトウ、ヒルガホ、エノコログサ、ツユクサ 二五二頁
- 一ハマナス、アスタ又は單瓣コギク 二五八頁
- 一ニムフイア(ス井レン)ツユグサ、タデ 二九頁
- 一ボタン、マガリツト 一九九頁
- 一ボケ、白ツバキ又はキンセンクワ 二〇二頁

- 一ボケ、キス井セン、シユンラン 二〇八頁
- 一ヘチマ(花實のあるもの)ツユグサ、クサス、キ 二二七頁
- 一トケイサウ 二二六頁
- 一トクサ、ナデシコ又はコンギク 二〇九頁
- 一チュリツブ 二〇二頁
- 一チャボヒアフギ (自然活け) 二二三頁
- 一チャボヒアフギ 二二三頁
- 一チャの(古木)サ、リンダウ、ヤブカウジ、 二五九頁
- ヒカゲカヅラ、シユンラン
- 一オモト一種活け 一八四頁
- 一チミナヘシ、キ、ヤウ、カルカヤ 二二五頁
- 一オホヤマシング 二二九頁

- 一チギ、カイウ、ニムファイア、ニコングク又はキ、ヤウ 二四二頁
- 一チミナヘシ、カルカヤ、紫白キ、ヤウ、シダ 二四九頁
- 一カキツバタ(莖に曲あるもの)ポタン、マガリツト 一八三頁
- 一カラモ、アブラナ(ナタネの花)ツバキ 一九二頁
- 一カヘデ(温室若葉)ヒカゲカツラと(タンボ、コンギク) 一九五頁
- 又は(マガリツト、スミレ) 二〇四頁
- 一カヘデ(枝もの) 二〇四頁
- 一カヘデニコングク又はコンギク 二〇〇頁
- 一カキツバタ 二〇三頁
- 一カイウ、シマアシ、ニムファイア 二〇四頁
- 一カハラナデシコ 二〇六頁
- 一カンギク 二〇六頁

- 一カヘデ、(温室もの若葉)コンギク、ヒカゲカツラ、ハナゴケ 二四六頁
- 一カキツバタ(花實あるもの) 二五六頁
- 一カキ(紅葉)ハマギク又はアスタ 二六〇頁
- 一カンギク、サ、リンダウ 二六一頁
- 一タケ、ムメ、キク、ラン 一八九頁
- 一タマシダ、赤色アフヒ、マガリツト 二七頁
- 一タイサンボク 三三九頁
- 一タケ、レイシ、オモト 三三二頁
- 一ダリア、白ムメモドキ 二五三頁
- 一タメトモユリ 二五五頁
- 一ダリアア、スバラガス 二五七頁
- 一ツクモ、ナデシコ、又はコンギク 二〇六頁

- 一ツクモ、カキツバタ、カハホネ 二〇六頁
- 一ツ、ジ、ヤブカウジ、ヒカゲカヅラ、稚マツ、 二五頁
- シユンラン、落葉 二四七頁
- 一ツゲ(矮小なるもの)あしらいもの 二五四頁
- 一ツルモドキ、コハマギク 一九〇頁
- 一ネコヤナギ、ヤブツバキ、ス井セン 一七三頁
- 一ナンテン(實附)ス井セン 一七五頁
- 一ナンテン、マガリツト、ヤブカウジ、ヒカゲカヅラ 一九六頁
- 一ナツハゼ、シユンラン、コンギク又はサンギク 二六頁
- 一ナンテン(斜に發育したるもの)とカンギク、 三〇頁
- ガンピ、バラ、ナデシコの類一種 三〇頁
- 一ナツハゼ、ノギク又はコハマギク 三〇頁

- 一ナンテン、ヒアフギ、タマシダ 二七頁
- 一ナンテン、キスゲ、アスタ 二四二頁
- 一ラウバイ、ハボタン、又はオトメツバキ 一八八頁
- 一ラウバイ、ナンテン、ス井セン、レイシ 一八八頁
- 一ランタナ、ベコニア 二三〇頁
- 一ムメ、タケ、ス井セン 一七三頁
- 一ムメ(懸崖古木)ミ(ハボタン、ス井セン)又はセンリヤウ 一八二頁
- 一ムメ(野梅)一種 一八三頁
- 一ムラサキモクレン、キンセンクワ 一八六頁
- 一ムメ(幹に曲あるもの)(ス井セン、ツバキ)又は 一八六頁
- (ハボタン、センリヤウ) 一八七頁
- 一ムメ(直幹のもの)ミフクジュサウ、ツバキ 一八七頁

カンギクの内一種

- 一ムメモドキ、コハマギク 二六九頁
- 一ノウゼンハレン(金蓮花) 二〇九頁
- 一クロチク、キス井セン、ポタン 一九三頁
- 一クロモジ、キレンゲツ、ジ 一九三頁
- 一クマザ、 三三六頁
- 一クサアシ 三三六頁
- 一ヤマブキ、シネラリア 一九九頁
- 一ヤマザクラ、シユンラン、コンギク、ヒカゲカツラ 二〇四頁
- 一マツ、タケ、ムメ、ヤブカウジ、ヒカゲカツラ 一七〇頁
- 一マツ、バラポタン、又はポタン 一七二頁
- 一マツ、レイシ、シユンラン 一七三頁

- 一マツ、カンギク、シユンラン、ヤブカウジ 一七五頁
- 一マツ(懸崖)ゴバラ、ポタンの内一種 一七六頁
- 一マツ(一本のものにて三才一眞、行、草)を具備したるもの 一七九頁

- 一マツ(立幹)ラウバイ 一八三頁
- 一マツ、タケ、ムメ、シユンラン 一八九頁
- 一マツ、ツ、ジ、シユンラン、ヤブカウジ、ヒカゲカツラ 二〇三頁
- 一マツ(形状)レイシの如く發育したるもの 二〇八頁
- 一マツ(立幹)カキツバタ 二二七頁
- 一マツ、ツバキ 二三四頁
- 一マンキチスギ(坂地方言)ス井セン、ヒカゲカツラ 二四四頁
- 一マツ(小葉の若松)ヤブカウジ、未生コマツ 二四五頁

- フクジユサウ 二六四頁
- 一マツ、白キク 二四七頁
- 一ケヤキ(矮小なるもの) 二〇六頁
- 一フト井、カキツバタ、カハホネ 二〇八頁
- 一フジ(形状レイシの如く發育したるもの) 三三三頁
- 一フジ、キンセンクワ、カキツバタ 三三三頁
- 一コデマリ、ミアヤメ、コンギク、ヒメユリの類一種 三三三頁
- 一氷、コンテリクラマゴケ、カイウ又はカハホネ 三三五頁
- 一コンギク(ミヤコワスレ) 三〇九頁
- 一テツセン 一七四頁
- 一アカシア、ス井セン、アフヒ 一九四頁
- 一アカシア、ハマギク、ヒメユリ

- 一アカシア、ハボタン、マガリツト 一九四頁
- 一アスパラガス、フリジア、ハボタン、マガリツト、アフヒ 一九七頁
- 一アマリ、ス、キンセンクワ、ヒアシント、マガリツト、フリジア 二〇〇頁
- 一アセビ(形状レイシの如く發育したるもの) 二〇八頁
- 一アサガホ 二〇九頁
- 一アマリ、ス 二八頁
- 一アジサイ、カキツバタ、ユリ 三三頁
- 一アチキ、ハマギク、又はナデシコ 三五頁
- 一アシ、レン、ヒシ、ツユクサ、ウキクサ 三八頁
- 一アスタ 二四三頁

- 一 アカバウ 其他あしらいもの 二四七頁
- 一 アスバラガスミアフヒ 又はマガリツト、ボタン 二五四頁
- 一 アカシア、ホト、ギスサウ、ゲルベラーシ 二五五頁
- 一 サツキ(苔附シユンラン、ヒカゲカツラ、
白ヒラドヤブ、カウジ) 一七五頁
- 一 サツキ(一本のものにて三才「眞、行、草」を
具備したるもの) 一七九頁
- 一 サクラ(温室咲き)キセンリヤウ 又はキンセンクワ 一八五頁
- 一 サクラ、ツクシ、タンボ、スミレの類 一九七頁
- 一 サンシユウ(實もの)イヌガンソク、バラ 二五三頁
- 一 サ、ユリ 二五五頁
- 一 サバンクワ、(若木)キク 二六八頁

- 一 サツキ(苔附)ミカンギク、ス井セン、シユンラン 二七〇頁
- ヤブカウジ、サ、リンダウの類 二七〇頁
- 一 キンメイチク、キス井セン 一九〇頁
- 一 ギヨリユ、スカシユリ 一九八頁
- 一 キソケイ、カキツバタ 三五五頁
- 一 ギリユウ、アシ、ナデシコ、カハホネ、ヒシ、萍 三三三頁
- 一 キク(花銘明月花白色、花銘巴花黄褐色) 二六二頁
- 一 (直莖一輪附花壇もの) 二六二頁
- 一 キク(野生の莖に曲あるもの) 二六五頁
- 一 キク(雑種) 二六六頁
- 一 キク(大輪もの平籠活け) 二六六頁
- 一 ユキヤナギ、アマリ、ス、キンセンクワ 二〇二頁

フリジア、シクラメン

一ユキヤナギ、カキツバタ

一ユキヤナギ、ヒメユリ又はコンギク

一ユキヤナギ、ヒメユリ

一ユキヤナギ

一ユキヤナギ(紅葉したもの)キク(帯紅紫色重瓣)

一メツ(矮小なるアカマツ)コハマギク、貝殻

一シロユリ、マガリツト、コンギク

一シヤガ

一シヤクヤク(大輪もの)

一シダ、ハマギク

一シユカイダウ、ユキヤナギ

二〇七頁

二二頁

二三頁

三六頁

三五頁

二四五頁

一八四頁

二七頁

三〇頁

三九頁

三三頁

一ジユズタマ、ムクゲ、エノコログサ(狗尾草)

一シダ(小葉のもの)

一シヤクヤク(平籠活け)

一ヒガンザクラ

一ヒガンザクラ、ハボタン、マガリツト

一ビハ、ナデシコ、又はガンビ

一ビヤウヤナギ、ヒメユリ

一ビハ、カキツバタ

一ビラド、カキツバタ

一ビメユリ

一ピナンカツラ、サ、リンダウ

一モクレン、カイダウ、ボタン

二〇五頁

二五頁

二三八頁

二二頁

二二頁

二二頁

二〇五頁

一九五頁

一八五頁

二六頁

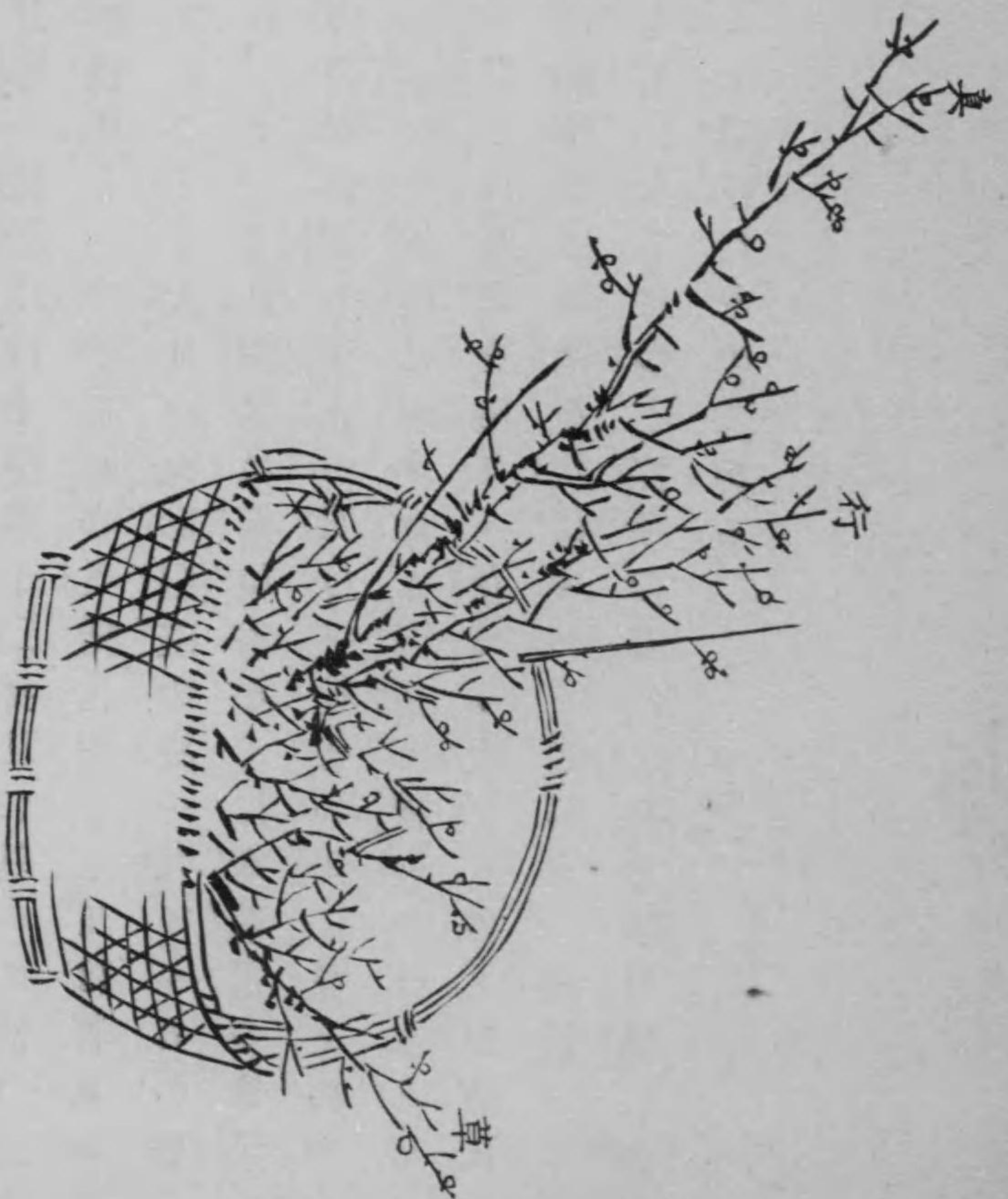
三六頁

三四頁

- 一 センリヤウ、ス井セン 一八九頁
- 一 ス、キ、チミナヘシ、キ、ヤウ 二二六頁
- 一 ス、キ、ナデシコ 二二六頁
- 一 ス、キ、ハギ、キ、ヤウ、チミナヘシ、フシハカマ 二五二頁
- クズ、ナデシコ

以上百六十種

著者 曰本書は原盛花瓶花初心者の手引とし凡て植物特有の生育状態を斟酌し之れを手型に當て嵌め一箇の花型を形成せしものなれば世の風流隱士の横幹の松を豎に活けて其の雅趣を貴び直幹の竹を斜に挿し其風韻を愛する如き以て投入法を説くは初心者をして其前途に過ちなからんことを恐れ秃筆を呵して初步訓蒙の爲に本書を表はせり、先輩諸氏敢て嗤ふ勿れ。

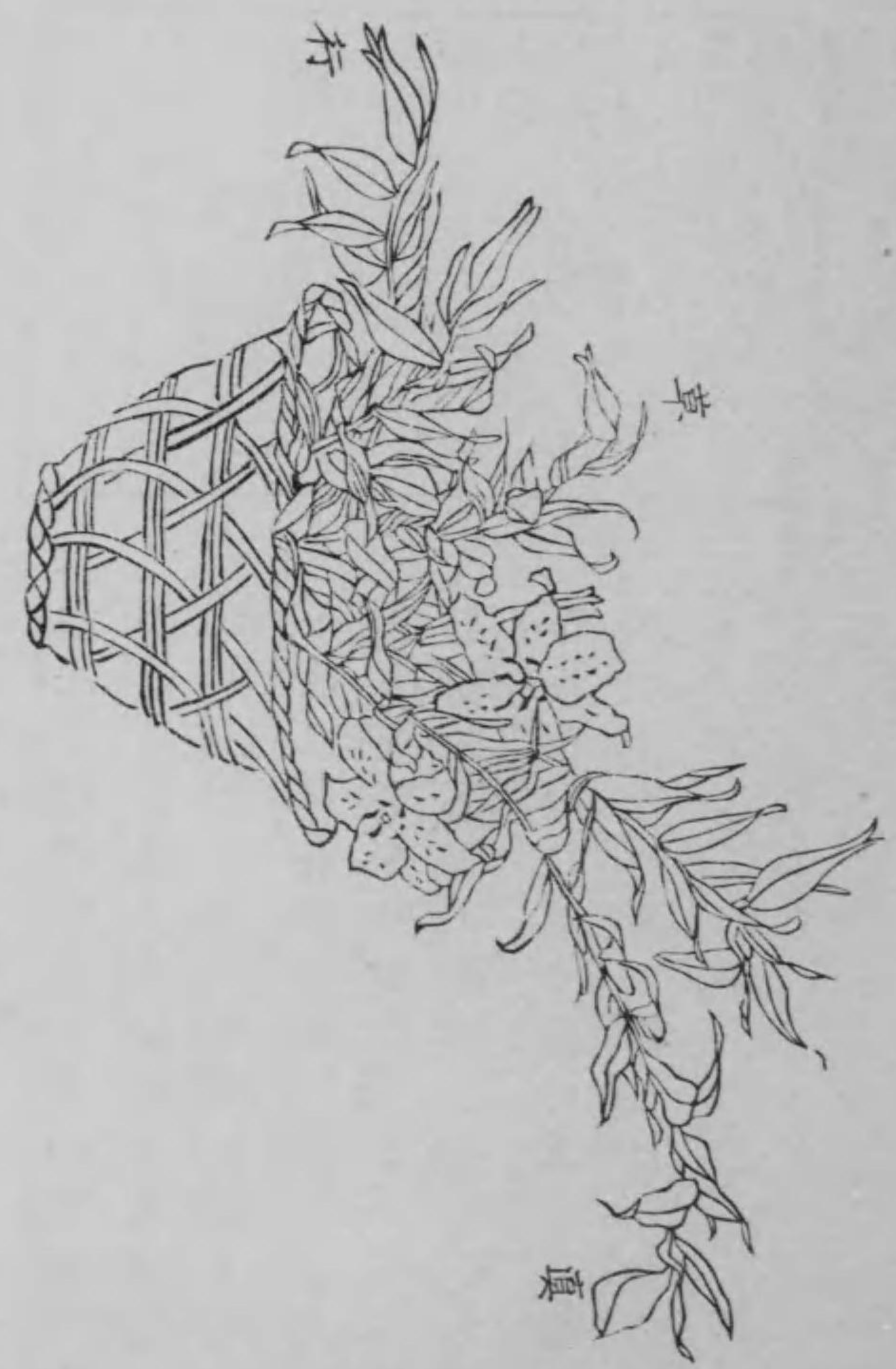


(一)

手型第十二種法第十例(追加)

第七十圖

一前頁野梅一種活けは手型第十二挿法に基いて活けたものである。惣體盛花として特に初心者稽古用として著者本編最初に注意することく大凡は丸形白磁の經一尺くらゐの器を使ふのである、そして其懷又は草位谷などに寒菊等をあしらうて梅の根方の部分即ち花止め又は込栓等の陽に見えぬやうに繕ふのであるが今挿畫に示す如く野梅寒櫻のやうなもの、其性質の上葉ご花ごの時季を隔て、花のみ咲くもの、内殊に此野梅の如きは幽雅なる風情を現はすべく之れを一種活けとして前條のあしらひなしに少し深手の器に之れを活け陽に根方の見えることを避けたものである。



第七十一圖
手型第十一挿法第五例(追加)

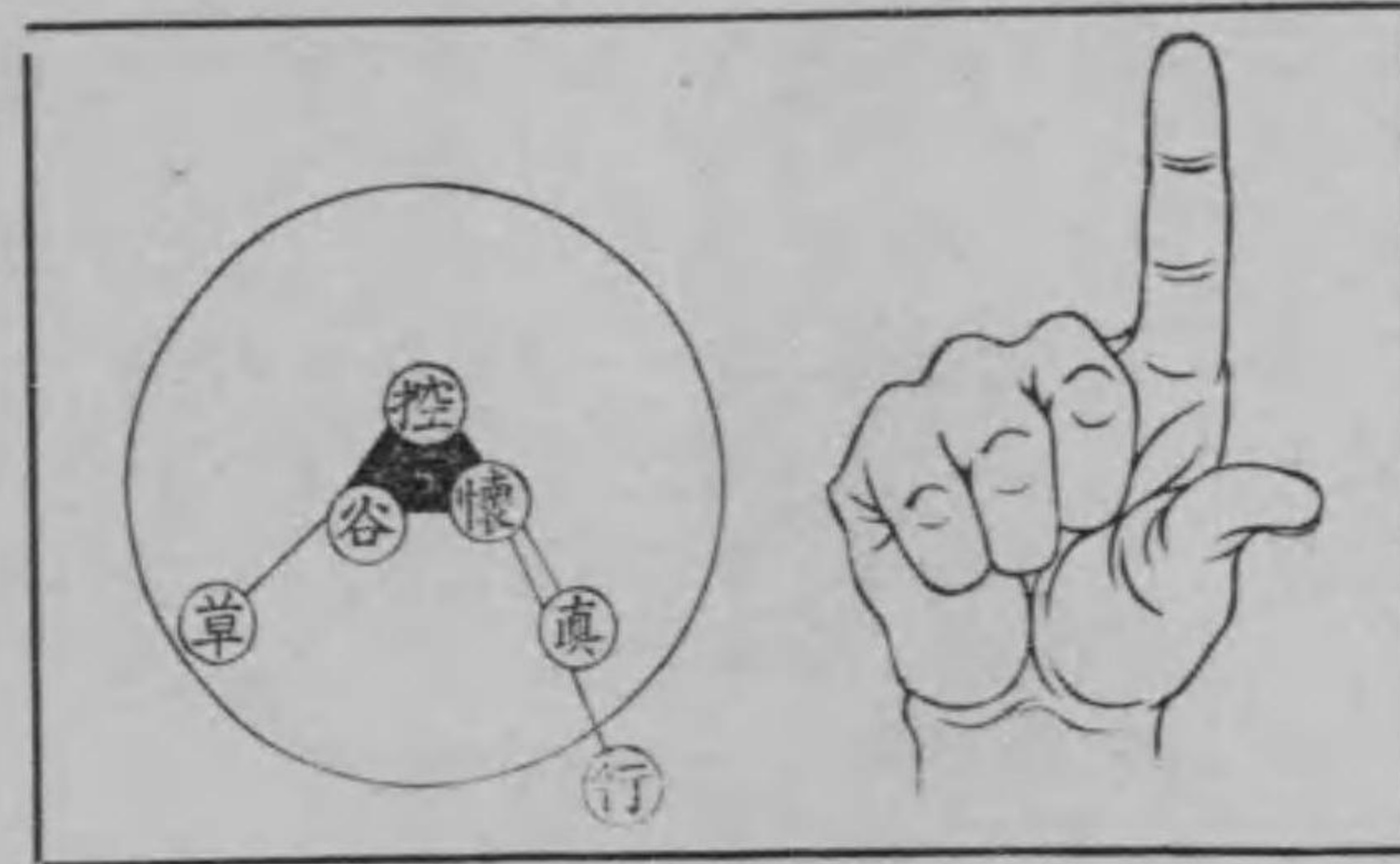
(リロセトメタ)

圖二十七第
(例一)法插七十二第型手



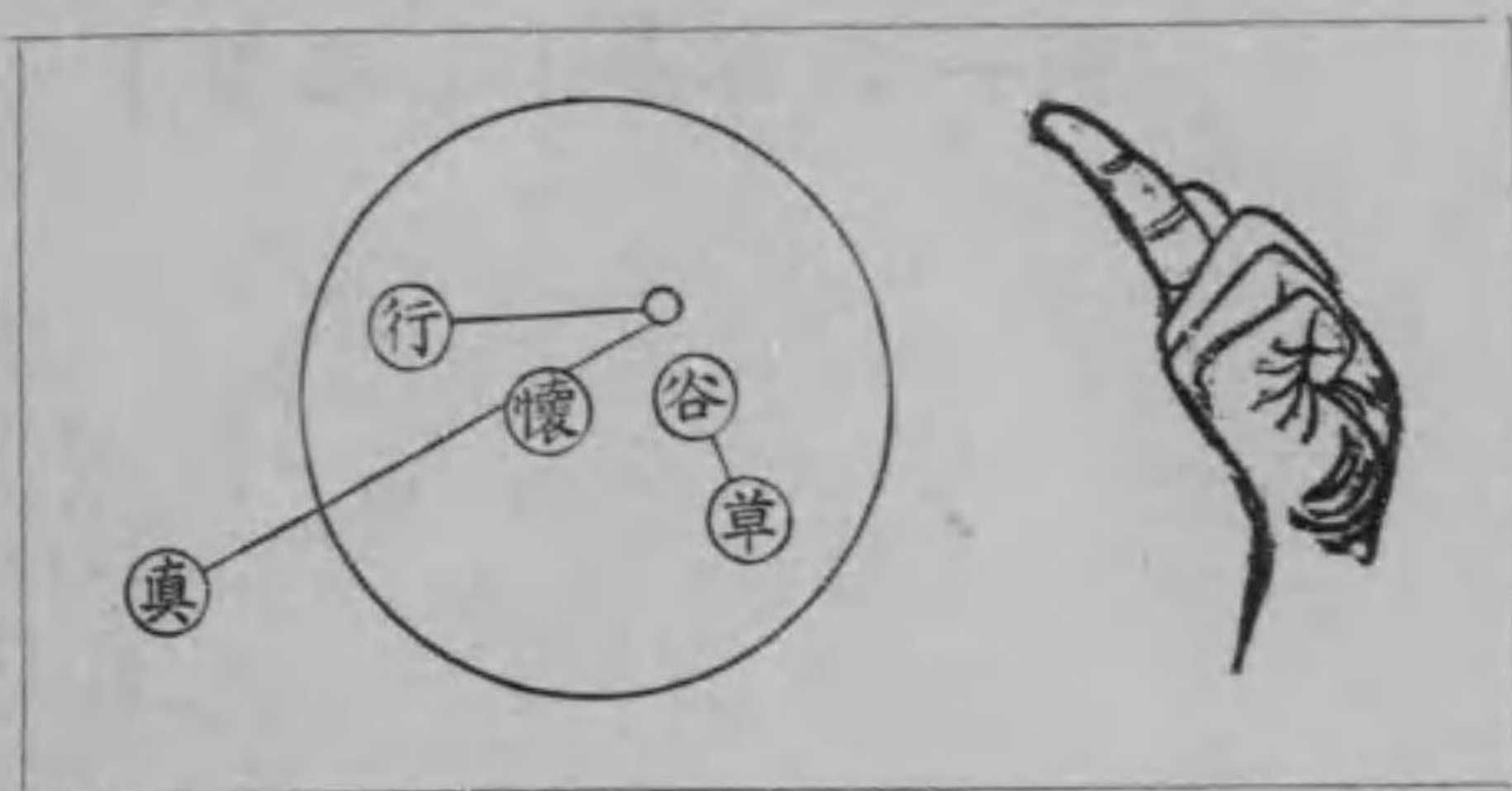
(クキ ハビ入斑)

圖 瞰 俯 法七十二第



一本法手型は原型(第一手型)を其儘
 手前に屈曲し手型第十五挿法のもの
 より以上に強く拇指を以て殆んど水
 平線に自身を指した姿である、此挿
 法は其草木の姿勢上よりして袋形の
 籠又は壺形の花器と相待つて落附の
 ある花型になる依て本法に適する草
 木は口經の廣き器には不適當であら
 う。

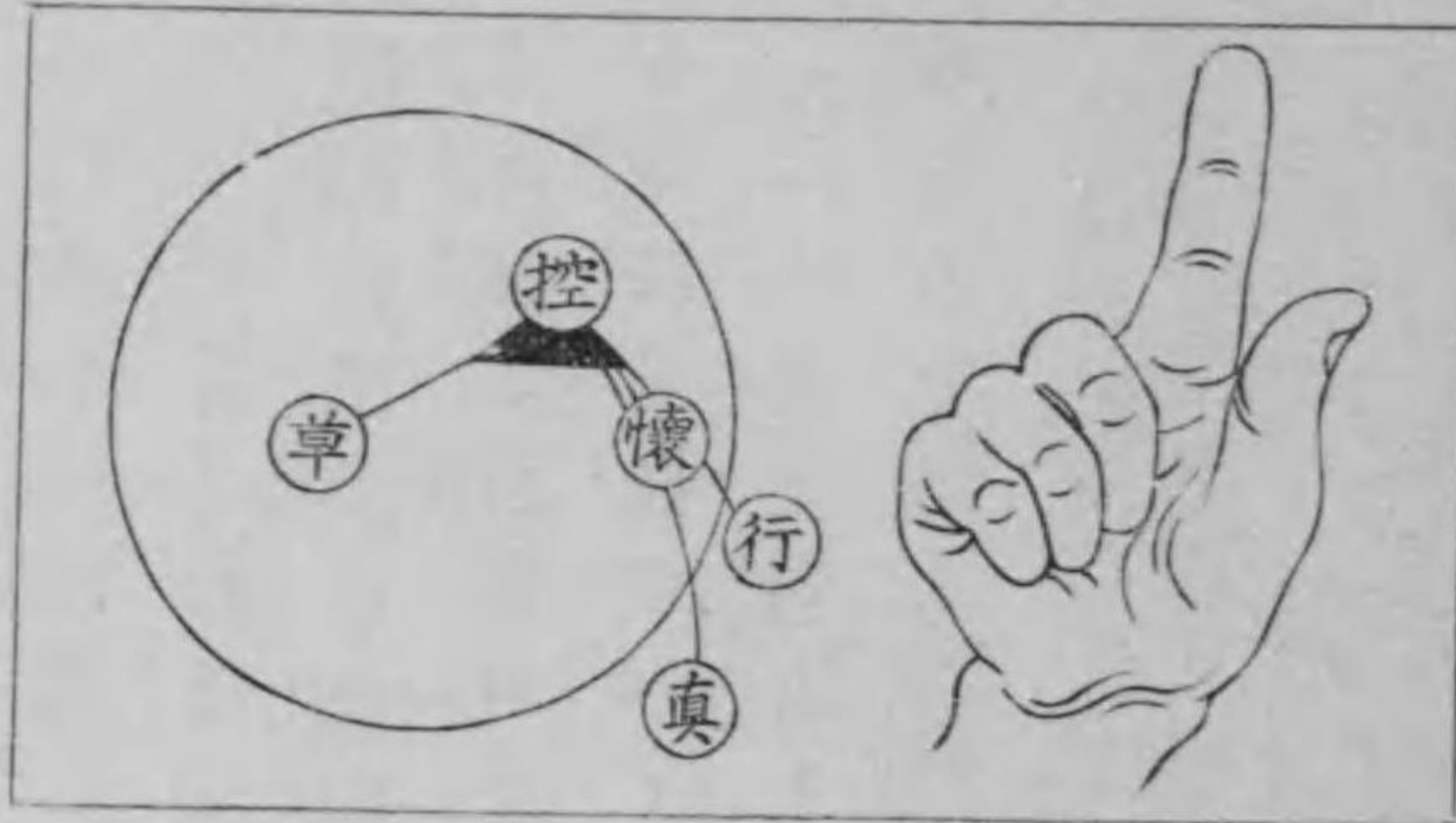
法八十二第 俯瞰圖



保田式手型第二十八挿法説明
 一本法手型は第二十四手型を圓分度數
 割の九十度即ち直立状のものご第二
 十二手型の水平線状のものご中間
 即ち四十五度の傾斜線状の花型であ
 る本法特異の點は大凡の花型の懷の
 ものは原型に基其多くは眞行のもの
 中間低き箇所即ち懷に抱へらるゝ
 如き姿であるが本法のものは主たる
 ナンテン直幹の美を現すべく此懷の
 ものは俯瞰圖の位置ごしては同じこ
 ごであるが之れを根ごしてナンテ

ンの根元の前後及び左方又は三本の幹の集合點に低く見え隠
 れにコバノギハウシ、ツワ、シャガの類をあしらうのである
 尙ほ本挿法は其挿畫にある如く眞行位ナンテンの葉莖が幹の
 左方下面に發生したるものに適用したものである然し今假り
 に其葉莖の大部分が幹の右方上面に發生したものとするごき
 には俯瞰圖として同一であるが正面より見て眞位と行位の
 ものとの傾斜角度を轉換して眞位の上には眞位と行位の
 は下部に見えるやうに納れる。又此原則によつて早咲のキク
 で斜に育ちつゝ花頸の割合長く且つ鈍き角度を以て其花の擡
 頭し姿の婉曲したるもの五、七本を以て色合の地味な水盤に
 活けるのもよろしい、次に挿畫に使つてある花器は輪高臺の
 ものと思ふて頂きたい。

圖 瞰 俯 法九十二第



第十三章

一本法應用の花弁は前第二十八挿法説
 明の内花頸の長キクの姿勢が前者
 より一層根元より婉曲して殆んど弓
 状に發育したるものを以て其内花葉
 の損傷せざるものを眞位として器の
 後右寄り手前に向ひつゝ、盃を手に
 した如く花を眞直に入れ次に蕾のも
 九

圖三十七第
 (例一)法挿八十二第型手

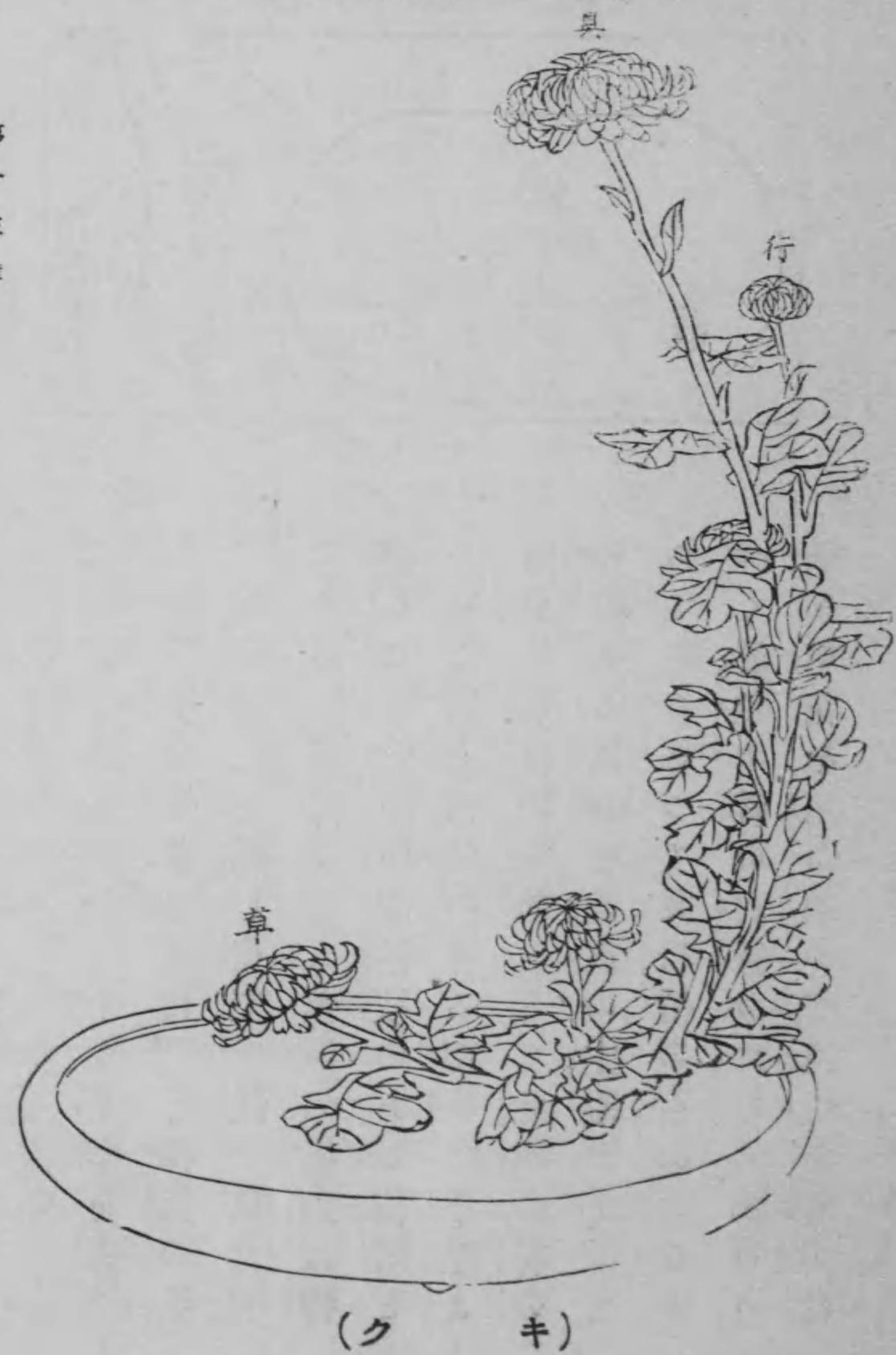


第十三章

(クギンカ ンテンナ)

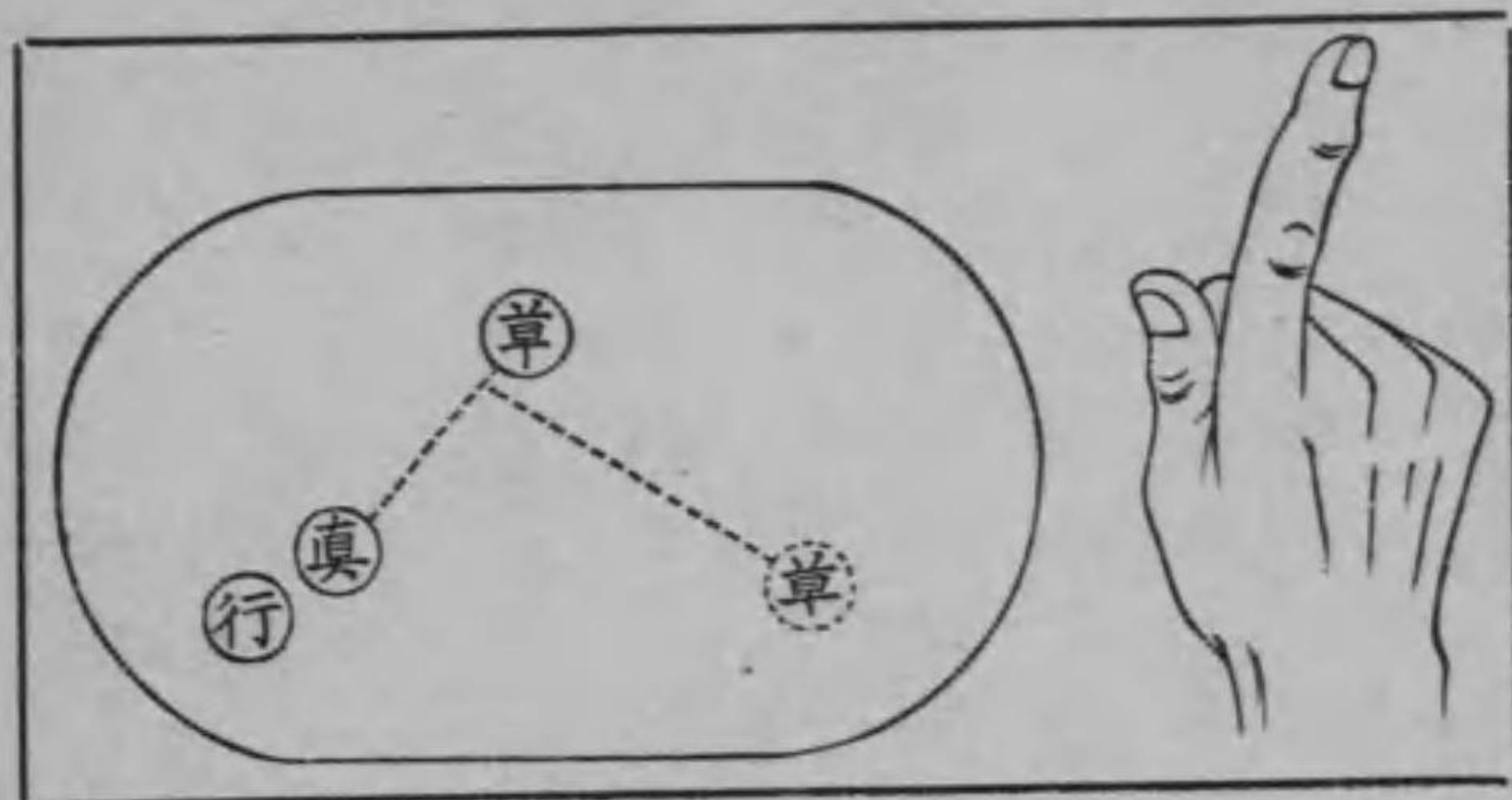
八

圖四十七第
(例一)法挿九十二第型手



第十三章
 のを手型の「行」の型ちの如く眞位のものとし餘り間隔のなきく
 らゐに入れて又懐のものは正面より其花の全形の半分程見え
 るくらゐに入れてるのである尙ほ草位及び控のものは挿畫及び
 俯瞰圖に依つて参照了解せられんことを望む。
 一却説本法は此他凡ての挿法との特點としては本種キクの自然
 美を單に發揮すべく一般挿花法の定規に拘泥することを避け
 其「谷」の花を省畧したこゝであるが場合により莖頂に葉のみ
 あるものを低く「谷」ごして入れるのもよい。

法十三第 圖 瞰 俯



第十三章

保田式手型第三十挿法説明
 一本法手型は前條第二十九手型を以て
 其儘手甲を挿者自身に面し拇指の第
 二關節以上を現し花型を低く見た姿
 である、依て眞位人差指の指頭は挿
 畫ムロの幹の中間枯枝のある箇所と
 し其れ以上枝葉のある部分は手型よ
 り見て眞位の余勢として此木の幹の
 雅趣ある部分を觀賞の主眼としたも
 のである依つて其行位のものなる
 べく眞位の幹の目障りならぬやう
 低き草花を用ゐる随つて草位のもの

單に草座のある箇所を現はすくらゐに低くシダの類をあしら
 う、箇様に三才の出來た上で俯瞰圖に示す如く花器の片側に
 眞位のものご平面花器の調和を計るべく改めて草座を作り
 之れに黄白又はクダ山菊の類を手型第十二挿法により花數を
 少く淡白と活け又ムロの根方等にもヤブカウジと取交せてあ
 しらうのがよい。

一本法例用のムロと手型第二十五挿法例用の松との應用法の相
 違の點は彼の松は姿勢眞位行位を備へ且つ其風韻を愛すべく
 他の雜種の扶助(あしらひ)なしに孤立して容姿端麗なる氣分
 を備へ落附いた花型である然し此ムロの木は盛花用の大きき
 のものごしては其姿勢矮小蟠屈したるもの又は若木の直立し
 て根元より枝葉の繁茂したるもの多く依て懸壺瓶花用ごして

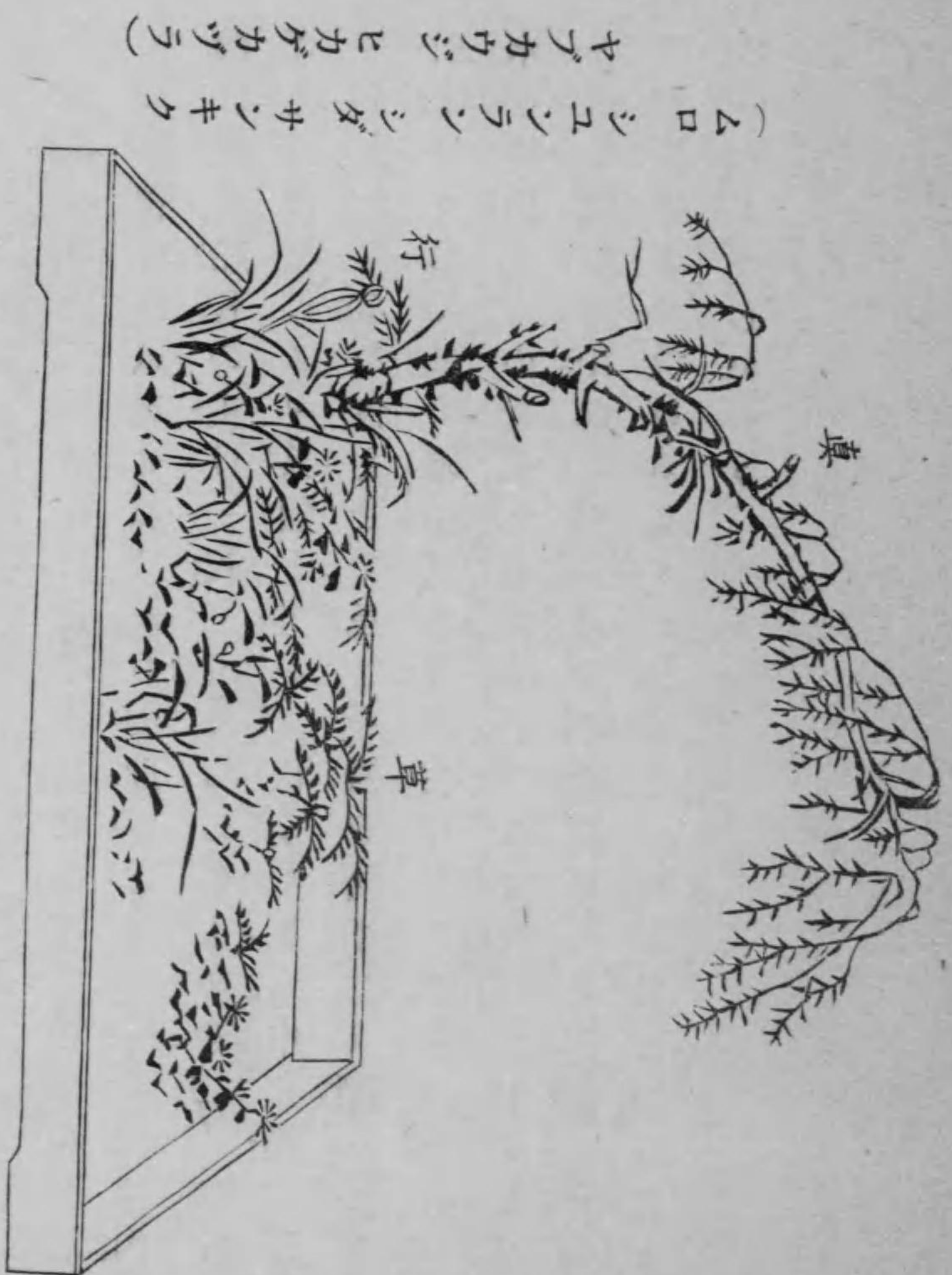
第十三章

二三

第十三章
 相當の材料を見出すことはあるが立體盛花の應用材料として
 は一向に見映あるもの少く尙ほ假りに挿畫ムロの木が彼の松
 の如く眞行位の格を具備したものと其松と同じ挿法に據る
 こととしても斯道の見地よりして其の氣韻に乏しく只に稽古用材
 料として之れを取扱ふべきものである依つて單獨に此ムロの
 如きものを活け床に飾ることは心なきもの、仕業である。

第七十五圖

手型第三十挿法(一例)



活花の水の簡略仕替へ方
 一流儀花の竹の二重活け又は平水盤に盛花等の水の仕替方に就ては餘程の注意をせねばならぬ此水を仕替へるには内經三四分程の鉛管の丈一尺二寸くらゐのものを「フ」の字型に曲げ花器の型により其短き方か又は全部を水中に横に浸しなるべく充分に水を含ませて長き一端を拇指にて壓へつゝ靜かに引上げそして他の器を低き箇所を受けて拇指を離して花器の水を排出するのが最も輕便な仕方である、尙ほ此鉛管を曲げるときには其中に干ひた砂を填めてをくご局部が平扁にならずに恰好よく曲げるここが出来、然し又たゴム管を代用するものもよろしからう。

花の飾り物切通し一貴賤老少を分るる佛陀
 とおのちを愛する聖仙姑は海と西も
 事なり唐土の林和清物の中一陶器の菊を
 常一固若ぬ愛澤不流るゝ花を常より事古
 今ほはきききいさるゝ其来好す外様
 異うといふ花より華を供するたまは花を
 常は貴すもの色彩をくはるゝ又よき花
 常は貴すものおれも總てよしの花の如く月を

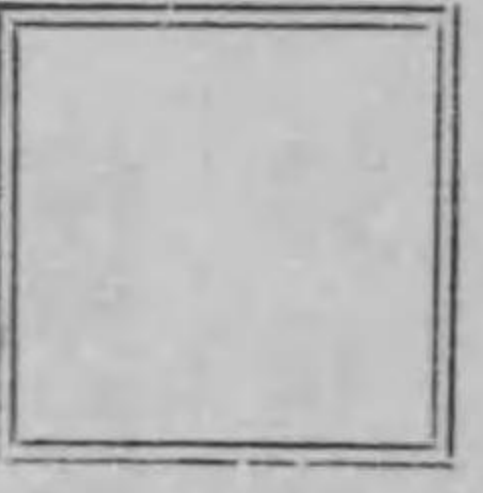
此書第一巻を女子等其日好の子も頗る喜ぶ
 方とすしやうも遂に上掲する事なく揮聖
 公解及依附國を其も自明の如く一説の如く
 著す大冊切符たぐ一之主人も指す事なく
 既文を多し好む道も儒國浄より方為
 之に新案見たり其修りも其威の如く
 尾不誤れしと爾玉

大阪府東區南渡邊町八番地
 盛花俱樂部
 前田文進堂

大正十一年八月拾日印刷
 大正十一年八月廿四日發行

定價金貳圓

不許複製



著者 保田不識菴
 發行者 前田梅吉
 發行者 盛花俱樂部
 印刷者 日本印刷製本株式會社
 代表者 堀越幸

發賣所
 大阪府西區立賣堀南通六丁目十二番地
 盛花俱樂部
 大阪府東區南渡邊町八番地
 前田文進堂
 電話 九一九九
 電話 二四七二

終

